

昭和十一年三月廿五日第三種郵便物
昭和十一年四月一日印刷 每月發行
「通稱」第百十四號 第十一卷四月號

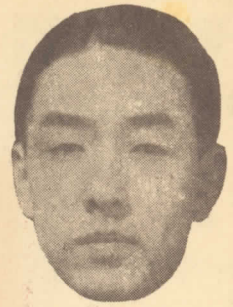
通稱



豐原堂製

第十一年四月號

白根俊筆



市川男女之助は劇壇の雄、市川男女藏門下の秀才である、劇壇諸名士の推選に依り新たに新興キネマ京都撮影所に入社、明日の時代映畫界を擔ふ榮光あるスターとして、輝々たる前途を囑望されつ、その第一回主演映畫に着手した。
その第一回主演映畫は、原作土師清二特意の痛爽時代もので、雑誌「富士」に所載された興味横溢の一作

市川男女之助

オ
ー
ル
・
ト
ー
キ
ー

入社第一回主演作

女貞本倉



新 興 キ ネ マ 株 式 會 社

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

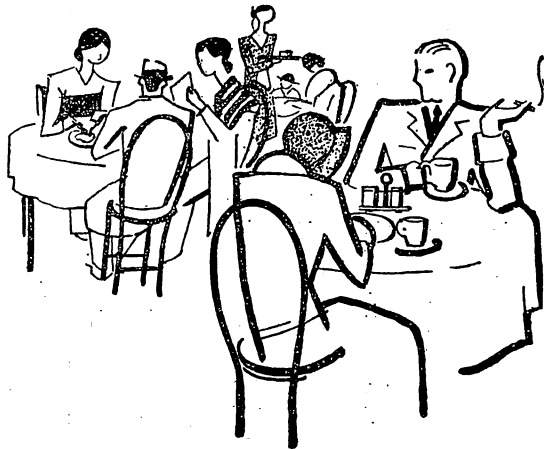
道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
京都支店 北新地裏町
木屋町ドンブリ橋





◆道頓堀・第十一年・四月號 第百十五輯◆

★ 口 繪 ★

□中座・壽三郎の向井善九郎・魁車の中川縫之助・小太夫の矢坂源次兵衛・右團次の魚屋惣次・市藏の月岡刑部・壽三郎の渡邊綱・長三郎の炭屋嘉吉・霞仙の女房お作。
□浪花座・久松のおつた・島田の駒形茂兵衛 □歌舞伎座・五郎の娘おかよ・街頭スケツチ舞臺面・五郎の惣右衛門 □角座・大江美智子の雪之巫と關太郎

◆表紙
◆扉

辰橋
辰橋 (壽三郎・魁車)

長三郎に寄す……………高安吸江 (三)

魁車と長三郎を語る……………菱田正男 (四)

壽三郎と万三郎……………森ほのほ (七)

會我廼家五郎を語る……………中山楠雄 (九)

五郎劇雜感……………山口廣一 (一〇)

たちゆばり……………長谷川伸 (一六)

澤田に愛された女……………新谷誠水 (一七)



私の女房役と劇團の變轉 (6) 都築文男 (三)

中井泰孝先生を訪ふ記 (3) 垣久桂子 (四)

歌舞伎座と中座 西尾福三郎 (二六)

その時折りの記 大橋孝一郎 (三〇)

道頓堀ライカ行脚 本誌特寫 (三三)

家庭劇樂屋風景 須田寛二 (三四)

祇園館に於ける團十郎と鷹治郎 (2) 山川聽雨 (三七)

寺小屋松王の型 編輯部編 (四〇)

讀者寄稿 谷惣之助・大西武夫 (四六)

あの當時！ (四八)

竹田信三・正木與志雄・初瀬音羽
丸 茂三郎・小川虎之助・二葉早苗

編輯後記 村上勝 (四六)

カ ッ ト 山中虹二

白雪

天下之銘酒

撰津 伊丹 藤

小西酒造株式会社





壽三郎の向井善九郎・魁車の中川の縫之助

中座の「肥後駒下駄」



〔上〕小太夫の

矢坂源次兵衛

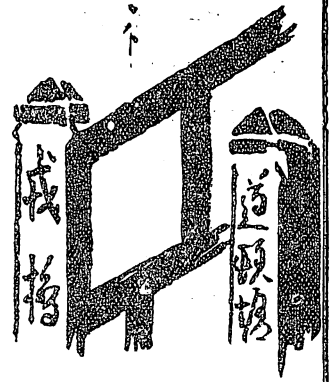
〔中〕右團次の

魚屋惣次

〔下〕市藏の

月岡刑部

魚川野 鱈魚 料理



柴藤食堂

二階 椅子席
三階 宴會場

電話南 四八一〇
九五四二
四八四四

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
で御座います

1. 不意の御來客に

1. 御酒ビールの御友に

1. キャンピングに

1. ハイキングに

1. 各地百貨店

著名食料品店

に販賣致して居ります

1. キンケイ印を御指定下さ

い



洋酒・飲料水・罐詰

株式会社・横山商店

大阪東區豊後町三





長三郎の

炭屋嘉吉

霞仙の

女房お作

中座
屋根の聲

大阪市東區京橋三丁目七五

株式會社

大

林

組

支店 東京、橫濱、名古屋、福岡、大連

營業所 京都、神戸、金澤、静岡、廣島

仙臺、京城、臺北、新京、奉天

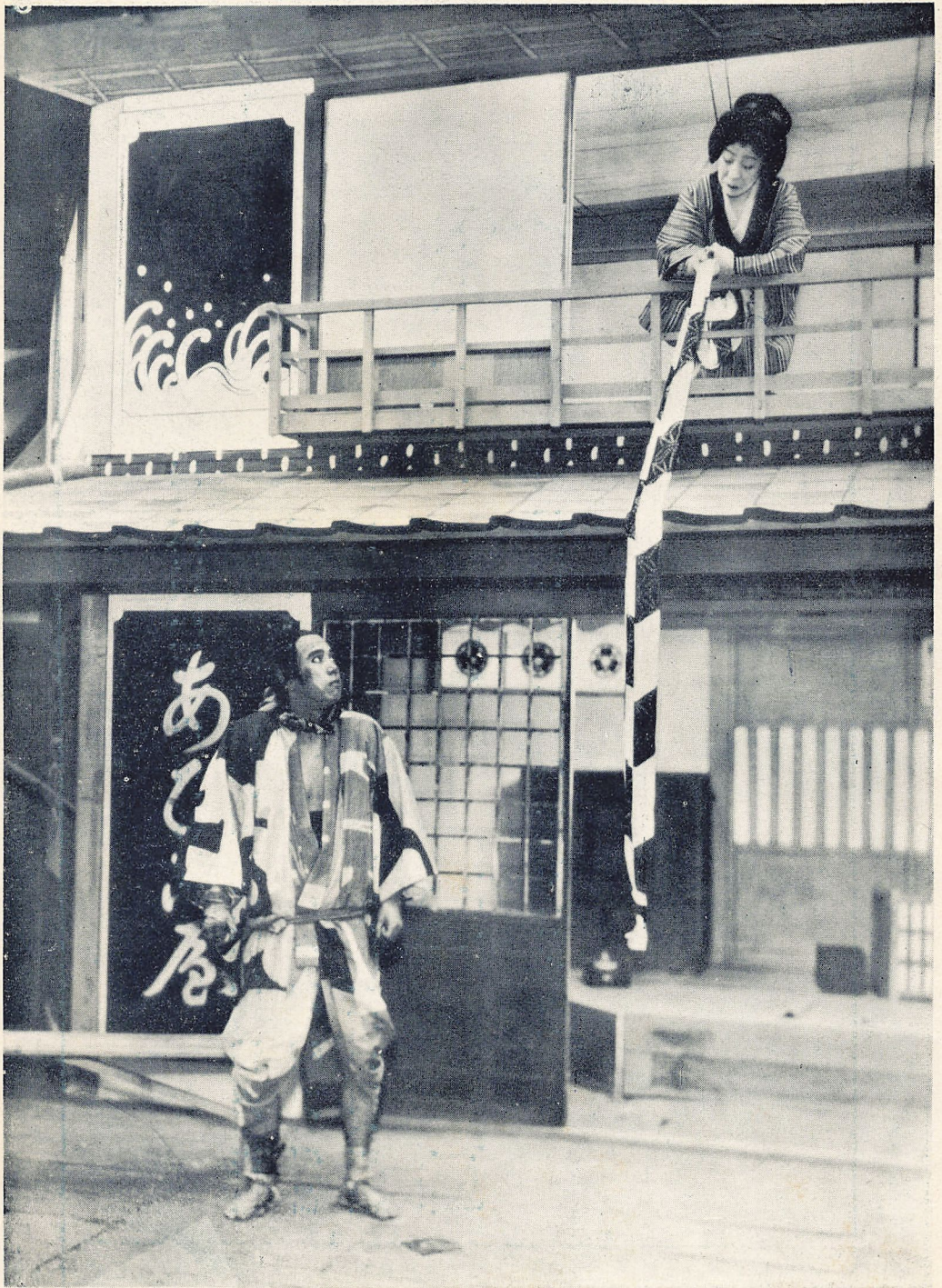
工作所 大阪、東京

茶

西區みろく

坐半

南門外



久松のおつ・田島の形兵衛



五郎

四月 初回

毎日 四時半 開幕
初日は 三時半 開幕

- 1 故郷の妹 一場
- 2 うわさ 一場
- 3 へちまの花 一場
- 4 幸運の渦巻 一場
- 5 街頭スケッチ 一場

相模 初回

◇マチネ◇
上演 狂言
◇十二時半 開幕◇

第一 結ぶの神 一場

第二 走馬燈 一場

第三 短慮の刃 一場

マチネ 御膳料
櫻菊 参 貳 壹
等 等 等
... 一 円 八 十
三 五 七
十 十 十
錢 錢 錢 円 錢

初日 割引 値段

櫻 三十五錢
菊 五十五錢
... 十一錢

前賣 團體
電話 (戎) 二八二八六

觀劇 御宴會券
を發賣して居ります

御一人様
三円九十錢

御場席は 豪華席
御食事は 洋食又は和食
五郎劇繪本券 附和食
御申込みは 二十人以上

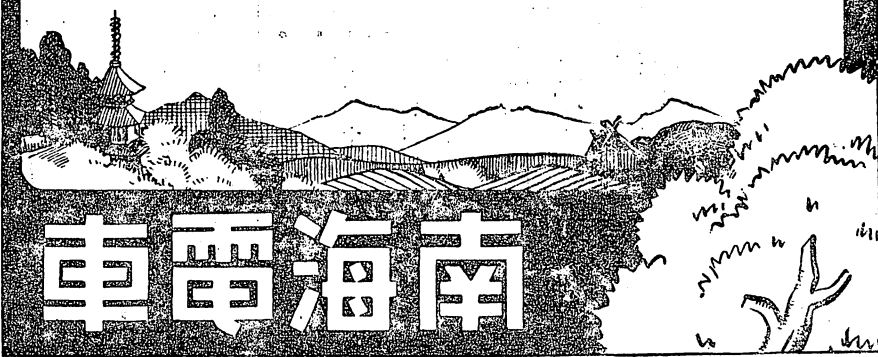
大阪 歌舞伎座

春は南海沿線へ

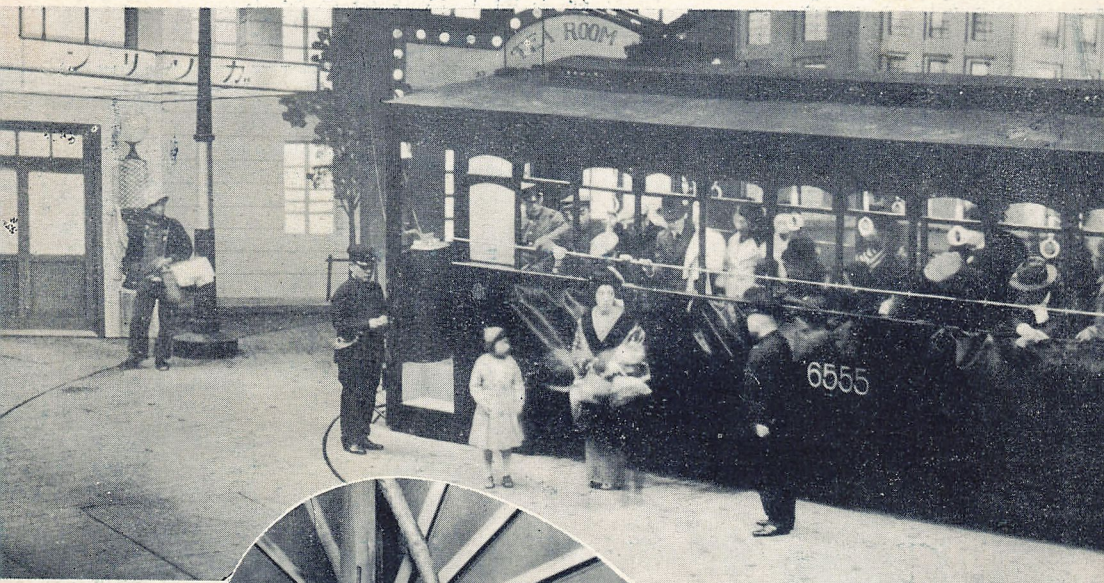
天
下
高野山

南海線開通五十周年記念
五月十日まで
高野山大法會
金堂・御経閣が
御好記念物はつき付
大割引
二圓八〇錢
随波より往復

靈泉	南紀樂園 温泉	島めぐり	つまくら じら	めぐり島	さくら	楠公遺蹟 めぐり	和歌浦	名勝	西國二番	彼岸櫻	絶勝
天見温泉	白濱湯崎温泉	辨天島 <small>南部 鹿島遊園</small>	淡加輪	加太	天野山・觀心寺	長野・三日市町	汐干狩	和歌浦不老園	紀三井寺	新和歌浦	



南海電車



五郎劇四月公演

上「街頭スケッチ」

舞臺面

下「幸運の渦巻」

五郎の惣右衛門

角座大江美智子一黨

大江の雪之丞と闇太郎



四月號

月刊・演劇雑誌・新報
演類編

第十一年

第五十輯



魁車の小百合
壽三郎の渡邊綱

『辰橋』



長三郎に寄す

高安吸江

長三郎君。

お父さんが亡くなつてから、まだゆつくり過て話したことがないが、其後は一體どうしてゐます。

いよゝ大阪の芝居も心細いことになつて來たが、それは前々から豫期されてゐた事であるし、殊に關西唯一の大黒柱として諸人渴仰の的となつてゐた鷹治郎氏の嫡子としての君が、輕からぬ責任を自覺して大に惱んでゐたのは、私にもよくわかつてゐるので、君の事が氣になつてしやうがない。

しかしそれはとにかく、實際問題として君は此れから何うしやうと考へてゐるのです。

お父さん歿後の一年間、君が演つた役は歌舞伎では太十の十次郎に忠臣蔵の力彌と千崎、新しいものでは春琴抄に地獄變、踊で世之介に小袖物狂などであつた。

その中でさすがに大歌舞伎であると思はれたのは、正月の力

彌であつたが、そうした君の傑作も對照となるべき相手役、それに君の年齢の關係から、遺憾ながら最早未來性をもたぬものと考へざるを得ない。老いたる世之介や、良秀にさいなまれる秀信なども佳作と稱してよいと私は思ふが、それだけではまだ一座の主將たる位置を獲たと言ひ難い。

先代の藝を其儘踏襲することに努力してゐる扇雀君が、果してそれを終生の仕事と考へてゐるかは知らぬが、とにかくそれを世間へふみ出す第一歩の目標としたのは決して悪い事でない。君はしかし扇雀君のやうに、亡父の風をありの儘に模倣するに適せない體質を備へてゐる。君の體質は生來お父さんのそれと大分違つてゐる上に、後天的に更に惠まれない健康の影響を受けた。お父さんの所謂豊麗とか、艶治とかいふ代りに、君には清楚とか雅秀とかの言葉がふさはしく、先代のやうに觀客を威壓する熱や興奮を君から求めることは無理である。

是までから時々單獨に一座を率ゐたことのある扇雀君よりもお父さんは常に君の事を氣にしてゐたと見え、私などへ幾度となく君の成績について尋ねたが、其返答が良いと、非常に嬉しさうに見受けられた。

此れは君の弱々しい素質が御大自身のとあまりにかけ隔つてゐるからの憂慮であつたことは無論であらふが、一方から考へると、そういふ風に君が先代と異つた點をもつのが、同時に君の特徴であり、その素質を鍛へ上げて異彩ある特殊品に完成させるのが君の進むべき途であると云ひ得るのである。

最近君は清玄を演らされたとか聞いたが、その結果はどうであつたか、恐らくそれは君の柄でないと思ふ。清玄のやうな、どしどしとい、強い執着をもつ役は君に適せぬ。それよりも寧ろ君は、絶えず他の強い力に左右されて行く弱者の方にはまるので、先年牡丹燈籠の新舞踊(?)で成功したのもその爲めであつた。

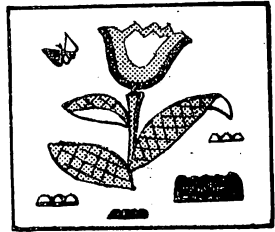
私はそれで清玄よりも、同じ坊さんながらお龜與兵衛の後篇卯月の潤色などの方が遙に眞向きであると考えた。女を殺す程の勇氣もない與兵衛は死に損ねて法師となつたが、終に妻のあとを追ふ。此妻の幻影に狂ふ處に重點を置いて活躍すればよいではないか。

これと似たものに二板繪双紙がある。此劇は先年お父さんによつて演ぜられたが、肝腎の中心場は未成品であつた。女は二階、男は在所の堤と、所は替るも同時に死なうとの約束かたくなに所謂血死期の道行で互に夢うつゝの境に迷ふて玄覺に捉はれながら死んで行く、此れを適當な演出にするともノになるべきだと思はれる。

元來近松の世話浄瑠璃廿數篇は明治以降殆ど全部舞臺に上ほされたが、其の盡くを先代が演つたわけでもなく、また演つた全部にしても、それが皆先代に適つてゐたとは云ひ得なかつた。それで君はまた君として適するものを其中から探し出し、君としての解釋によつて更に研究し直す必要がある。生玉心中小かん平兵衛、それから博多小女郎に鎗の權三、場合によつては油地獄なども試験的にやつて見ても面白からふ。

來月は肥後の駒下駄が出るそうなる。あれは先代の出世藝で、それも末廣家が縫之助で引き立てゝくれたのである。君に駒平が演れないことはないが、それよりも小笠原隼人の方が向くと思はれる。それから唐人殺も悪くないし、又お父さんが演つたかどうかは知らんが驚塚なども君の畑らしい。

踊や新作ものに就いては又重ねてのことにするが、君は今、新生の苦惱の時機で東西を通じて君位のもの處に一番人材が乏しい一ツ大に奮起して其牛耳をとるやうに努めて下さい。



魁車と長三郎を語る

菱田正男

延若、梅玉、壽三郎と共に關西劇壇の四巨頭といはれてゐる人に中村魁車がある。故鷹治郎門下の高弟、立役、女形に、老け役にどれとして出来ないことのないこの人は全く重寶な役者である。

今年六十一の本卦を迎へ、ますく元氣に、水々しい舞臺をつとめてゐるのはいかに役者稼業とはいへ驚ろくべきことである、舞臺にも熱心だが、人間としてもなか／＼一論居士である丈と親しくしてゐる自分によく丈の多忙な樂屋に長坐してこの人の一論を聞くのを樂しみにしてゐる、その説くところ、藝談に、世間雑話に、該博な智識を傾けて對手を煙に捲いてしまふ相當話上手なので聞き手を飽かせない。

最近の丈の舞臺を見て感じたことは益々藝の範圍をひろげて行くことだ、一昨年だったか、「夏祭」の義平次をはじめ勤

めて、老け役にすばらしい好評を博し「さまよへる十字架」で新しい劇に成功してゐる、極く最近でも「どんどろ」のお弓「河内山宗俊」の松江出雲守など、どん／＼初役に器用なところを見せてゐる。

鷹治郎の生前につき合つた數々の狂言で、この人の巧さは完全に認められてをり、又「かなへ會」として、梅玉、壽三郎と共に活躍してゐた頃の「關取手兩轍」のおとわでも「涙の四ツ橋」の藝妓衆次でも、この人には打つてつけのものだ、重々しく鎮坐してゐる動きの少ない役よりも、むしろこまめに立廻る稔々しいか、お俠なといつた役廻りの方がこの人に適るやうだ元來が粹に出來てゐる人だから、そうした役に向くわけだ、丈を決して女中役者といふのではないが、例の「鏡山」のお初など正に天下一品の當り藝だし、去年の顔見世の「逆櫓」のお筆

もよく、「雪之亟變化」の闇太郎も面白かつた。

「丈の舞臺は一人芝居をしすぎるので不快だ」と貶す人もあるが、それはお互に好きすきだから已むを得ない、あの達者に舞臺を渡つて行くところに丈のよさがあるわけだ。故三島霜川氏が「役者藝風記」に成太郎時代の丈を評して曰く「成太郎は眞に融通の利く巧者な役者である、また成太郎のものも持つてゐる、だがしかし、ズバ抜けたところもなければ割合に舞臺で光り得ない役者である。人を引きつける力と謂つたやうなものも延二郎（今の延若）福助（今の梅玉）にさへ及ばぬ、そして悪くすると一種の重寶役者で終つて了ふ危険性が無いでもない、天分か、修業の足らぬせいも、大いに警めなければならぬ、才氣と器用と役者ぶりだけでは尋常の役者にはなれても、大きな役者にはなれない」と書いてある、「その頃の丈を巧く言ひ現はしてゐるものだ」と言はれてゐるが、今の丈にも矢張りこれが言はれるかどうかはともかくとして、丈はたしかに才氣があり、器用な役者である、關西劇壇にこの人あることは實際心強い、昨夏の大病以來健康を前以上に取り戻したらしいが、今後とも益々健在に、新作に、型物にウンと活躍してもらひたいものである。

次に長三郎丈について少し書いて見たい。

「踊りの長ぼん、芝居の中ぼん」といはれる如く、眞屬治郎の御曹子の長三郎丈は右團次と並んで關西での踊り手だ、だが、どことなく淋しい人である、性來の弱々しい體質がさう思はせるのかも知れない、踊はそれとして芝居の方も流石に名優の血を受けついでゐるだけに相當やるが所謂コツテリした可憐な演出である、義太夫物などになるとなかく「キマリ」に力を入れて手堅いが、それだけに車輪すぎて見てゐてどうかと思ふ時があり、もう少しサラリとやれぬものかと感ずることもある。ところが新らしい物になると、これが又相當にこなすから面白い最近では魁車、壽三郎らと一緒にやつた「さまよへる十字架」の盗人の如き、それに「春琴抄」の利太郎の如き一寸よかつたと思ふ、また老け役が出来る、いつだつたかの大阪中座で、西鶴の世之介を舞踊化したものが出た時、若い時から老人までを見せたが、この時の老人がおそらく初役だらうと思ふが、どうして、長三郎と思へぬよさがあり、誰かが「これで長三郎も更生の道が出来た」とひどいことを言つたが、いかに長三郎だつて若いのに、皺ばかり引いてもゐられまいし、「假名手本忠臣藏」が出れば、臺が立つてゐても、まだ力彌をする位だからまだ若い筈だ、けれどもこの所作で老けが出来ることを發表し得たのは大きな收穫だつた。

「扇雀は鴈治郎に生き寫し」といはれてゐるが、何も扇雀ばかりでなく、長三郎とて親子だもの似てゐる、あの上春で、藤屋伊左衛門などやらせば鴈の若い頃は充分惚べると思ふ、「長三郎に紙治をやらせては……」といふ話は前からある、是非實現させたいと思ふ、親譲りの悪夢は困りものだが、これは仕方がない、それとすべての周囲の條件から扇雀に壓されてゐる形の不遇といへば不遇だが、それと決してクサるべきでない、長三

道頓堀の年極め御購讀を

おすゝめ致します

申込みは 當編輯部へ

郎には長三郎の藝域もあり、力もある、そしてその藝域の開拓に心がくべきだ。

それからこの人は扇雀よりお世辭がよい、こゝらはほんとうに親ゆづりだらう。いつ會つても挨拶は頗る町重で、こちらが面喰らふが、話に興が乗つてくれればスツカリ打ちとけて友人以上の親しい口を利く、こゝらに長三郎の赤裸々さがあるのだらう好漢の自愛、健闘を祈つて止まない。(十一、三、廿六)

營業種目

劇場・活動寫眞館・演舞場・各商店内外
各ステージ裝飾・ショーウィンド裝飾
カフェー・喫茶店裝飾・園遊會々場裝飾
各徽章・慶弔花輪花束類・各神社用稻寶來

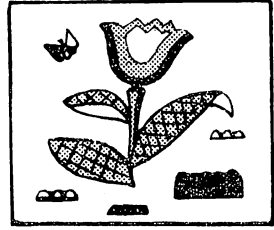


花 六 本 店

店主 萩原吉三郎

營業所 大阪市南區千年町二九
電話 南 ② 二八七三番

工場 大阪市東成區片江腹見町



壽三郎と万三郎

森 ぼ の ぼ

A. 井上、小太夫などとコンビしてゐた壽三郎が……オット世間並みにコンビなんて新語を遣つてしまひました。全くコンビだのトリオだの、流行語といふやつはキザですな。マアそれはそれとして、今度は魁車、長三郎などと一緒になりましたな。

B. 壽三郎氏この處大分融通されます。

A. 融通……なる程……。

B. 重用……と言ふべきでせうが、今の處では……ですな。併し、本當に重用されるやうな時を早く將來させたいものです。

A. 仕打側もさういふ處から氣を入れて育てゝゐるんぢやありませんか……大層大な子ですけれど。

B. 全く、大な子ですからねハハハ、。

A. あの子は一寸育ち損つた形がありますな。

B. さうも言へます。あの人の爲に第一劇場をもう少し存続させたかつたです。

A. 仰有る通りで……あの頃の芝居は今よりズンと面白かつたあのバアの女に惚れて一生をメチャメチャにしてしまふ擧者先生など傑作ですよ。

B. シバキとしても纏つたものでしたし、第一に熱があつた。色に溺れた果が、大道藝人の境涯に落ちて、あの妙な啼き聲を出す處なんぞ涙が出て來ましたよ。

B. あゝいふ、心から泣けるシバキを見たいです。所謂お涙頂戴の芝居でなしにですな。

A. する役者の方も、心から泣いてゐるといつた……つまり形で見せずに、グツと腹の底に燻めてゐる……さういつた處

ア　　キ　　ス　　キ
 プ　　ラ　　ン　　デ
 ベ　　ル　　モ　　ツ
 キ　　ー　　ミ　　ン
 ジ　　バ　　ー　　ン
 滋　　養　　葡　　萄　　酒

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印



元 發 賣 店
 横 山 商 店
 株式 會社

大阪市東豊後町三番地

電話東(94) 一六六二
 三〇〇三
 四六四九

を仕處にした芝居を見たいものですなあ……。

B. 團十郎なぞといふ人は、さういふシバキを好みもし、望んでゐるのでせうね。

A. 左様。悲しみを堪へる、悦しさを堪へる、さういふ力の強さが九代目にはあつたんですよ。

B. 壽三郎氏にもさういふバワフルな處が欲しいなあ。

A. 九代目や、今のお能の方の梅若万三郎のやうな力強い藝を……本當に腹の底から滲み出るやうな力を持つた役者は關東にも關西にもありませんな。

B. 左團次君なぞの藝風には力強さがあると思ひますがね。

A. さアねえ……万三郎さんは吉右衛門を一番褒めてゐられるさうで、あの人のシバキだけは腹から出てゐるから好きだ

と言はれるさうですよ。

B. 併し、吉右衛門氏のは、それ程力を入れてゐないで入れてゐるやうに見せかける器用さもあるやうに思ひますね。

A. 何しろシバキ上手の優ですからな。

B. 左團次君や壽三郎氏にはさういふ器用さ……悪く言へば、さういふズルさありませんね。たゞ眞ツ正直に押し行くだすりですが、其處にもう一息力が欲しいのですよ。

A. 彼氏にお能を見せることですな。特に万三郎のをな……さうして「力」に觸れさせるのですな。それが何よりの參考でせう。

B. 彼氏に話して見ませうか。

A. どうか勸めて下さい、本當に彼氏の將來の爲ですからな。

る語を郎五家廻我曾

雄楠山中

一
五郎を知つてから可成りになる。

五郎が始めて東上した時分は慘めだつた。始めて上つた時のことも知らない。新橋驛からチンドン屋のやうな恰好で、それも紙製の怪しい假装だつたさうだ——町廻りをした。五郎の氣持に本氣さがあふれてゐたのは分る。が、その結果はいけなかつた。芝居は散々の不入りだつた。たしか眞砂座かなんか、二流三流の小屋だつたやうに思ふ。

五郎の本氣でやつた假装の町廻りは今日でこそ、「チンドン屋の嘴矢でしだらう」などと五郎も笑ひ話にするがその時分の東京人には貧乏な乞食芝居さ、と云ふ程の印象しか與へなかつたらしい。練りに練つた奇想は斯うしてより悪い結果を招いてしまつた。

私は、その頃からすつと五郎を眺め

てゐる。そして、その熱を面白いものと思つてゐた。五郎は二度三度と、柳に飛びつく蛙の熱心さで上京して來た。完全に東京人に印象を與へて、勝利を獲得したのは三度目の上京の時だつた。五郎の藝のよかつたのもその理由かも知れない。五郎の観ひ所によかつたのもその理由の一つだつたらう。喜劇を求めてゐた人心にピッタリ來たのだ。が、それと同じ位重要に考へない譯にいかないのは時代だつた。

明治三十六七年團菊左を失ひ、日露戦争を迎へた國民は、戦争後始めてホツとして芝居でも見やうと云ふ氣になつた時だつた。名優の資格あるものが絶無の譯ではなかつたが、團菊左の至藝に親しんで來た人々は、その人以下の若い役者の藝を輕蔑する氣持があつた。事變後、荒んだ氣持には、歌舞伎劇のやうなテムボのない黓んだ藝術は

不向きだつた。新派が據頭して來たのも、五郎が進出して來たのも、そこに大きな原因がひそんでゐた。

事實、その頃の五郎の芝居は、鑿にして、衣裳にしる仁輪加同然のものでひどく薄汚なかつた。背景も何もあつたものではなかつた。そこに魅力があつたと云へば云へないこともないかも知れないが、正しい意味で演劇とさへ云へないものだつたやうな氣がする。その時分の芝居は、所謂五郎、十郎の一座で、形の上では十郎が上置きになつてゐたし十郎の輕いたくまない藝の方が東京人の趣向に投じてゐて、五郎は従の形だつた。

五郎が確實にその地歩をつかんだのは十郎と別れてからで、一本立として一座を形造つてからであらう。

しかしこれは外見上のことであつて曾我廼家の喜劇は、五郎の提唱にかゝ

り、五郎が相手方として十郎を選び、働きかけて一座を造り上げたのであつて、その興行方策もその出し物の選定脚本の執筆其他、凡て五郎の力によるものであつた。十郎の存在は、今日の蝶六とも違ふが、そのよき藝によつて一座を支持した、と云ふ方を擧げてよいであらう。

十郎は、五郎よりも退嬰的だつた。十郎は、大阪仁輪加風な鑿や衣裳を踏襲して、そこにロマン的な面白さを見出してゐたのに、五郎は、飽くまでリアルな衣裳、道具を用ひて、道化芝居から脱け出やうとのみ考へてゐた。二人が長い道連れとしての袂を別つた原因もそこにあるのだらう。

要するに前云つたやうな身躰しい五郎の芝居が、時代の進歩に連れて、内容と體裁とを漸次引き上げ、今日の押しも押されもしない曾我廼家劇に造り

上げ、三十年の長い舞臺生活の上に微塵も揺ぎを見せないのは偉いと云ふよりも驚異的存在だと云つて宜敷い。

二

人の噂も七十五日と云ふ譬がある。人の呆きつばさ、忘れつばさは、餘程此方が用心してかゝつても置いて行かれさうだ。

私達は最近の劇壇に、そのレコードを破つた驚異的存在を三人持つてゐる。

故人澤田正二郎、曾我廼家五郎、そして水谷八重子である。この三人は人氣を確實につかんで離さなかつた。澤田は人氣の絶頂に死んだ。残つた五郎と八重子の中、何と云つても八重子は未だ若いだから、その長さに於いて五郎の敵ではない。明治三十五年の劇壇進出から今日までの長い間、人氣を獨占してゐる五郎

は、勿論その點澤田より遙かに記録的だ。

何故五郎はしかく驚異的な存在なのだらう。第一に五郎の芝居は面白いからだ。面白く笑はせるだけで、その中に日本人的な正義観と、日本人的な思想とを持つてゐて、笑はされながら泣かされ、各自の胸にうなづける何かしら強い感銘を與へるからだ。

第二に、五郎の熱のある藝だ。澤田の成功もそれだつた。五郎は全身を叩き込んで十の力で芝居するから観客はその熱心に引き込まれない譯にはいれない。観客は、グラケ切つたい、加減な芝居には、よし如何に上手な藝であつても好感を持つものではない。

第三に、座員の統一と、座員全部の舞臺の上の眞面目さと、各自の特長を生かして、隙のない芝居を見せる緊密な親しさを數へ上げた。

引つくるめて云へば五郎のよさである。

何故なら、五郎はチャップリンと同じやうに、滅多に人の作品を上演しない。五郎は脚本を書く、演出をする、主演をする——五郎の芝居は、舞臺の隅々まで五郎の意志の下に動いてゐるので、端役の藝の上にも五郎の息がかつてゐるからである。

五郎の舞臺稽古を皆さんにお目にかけた。澤田も同じ調子に稽古して、「舞臺の面白さは、座長専制主義から生れる」

と云つてゐるが、一つの脚本が書き上げられて、その芝居の稽古に這入ると舞臺装置も彩光も衣裳も小道具もお囃子も鳴物も、全部五郎のプラン通りに動くのである。五郎が指定し、五郎が指揮するのである。一人の端役も、五郎の眼鏡にかなはない以上、舞臺を素

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電話 南 四一四・四四一番

— 宿 —
三圓
二圓
一圓
半圓
額半 懸

通りする譯にいかないし、その演技も殆んど云つていゝ位五郎の振りつけたものゝ再現である。

斯うして初日を出して見る。

小言が出る、註文が出る、訂正が出る。

顔の造りを思ひ切つて汚なく造らせて見たり、衣裳を全然換えさせて見たり、お囃子に新しい註文を出したりキツカケにダメが出たり。

二日目も三日目も、色んな工風が出て、色んな風に改竄される。そして洗ひ上げられたものが、五郎の芝居として何度も舞臺へ持ち出されるのである。悪からう筈はない。

これは五郎の熱心に起因することは言を俟たないが、座の人達が、五郎を信頼し、信服して手足のやうに動くからである。舞臺の上の五郎は口喧しいが、家庭生活、舞臺以外の生活に於

ける五郎は慈父のやうな優しさと、心からなる温かさを常に見せてゐるから座の人達の統率が亂れず、五郎の執拗以上の訂正にも躓いて行けるのである。少し賞め過ぎてるやうだが、嘘だと思つたら蝶六あたりに訊いて御覽なさい

三

そんな風だから五郎の忙しさは想像以上だ。

脚本を書く、稽古にかゝる、初日が開く。もう次の替り狂言の構想にかゝらなくてはならない。

一分も遊んでゐる暇はない。

しかも大抵の場合、芝居の樂屋へ這入るのは四時だ。四時に樂屋入りして十時半まで劇場にゐる。幕間には訪問客の應接、座員への舞臺上の注意。

十一時に家へ歸ると脚本の執筆。起きると、豫定表によつて人を訪ねなければならなかつたり、會へ出なければ

結核オタワリ
花柳病科
藤原医院
★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★
結核オタワリ

ならなかつたり——その間には好きな
映畫見物と女との逢引（これも是非勘
定に入れて置かなければなるまい）

斯うなると、いくら働いても時間の
豫猶なぞは出て来ない。しかも、この
生活を三十年間續けてゐるのだから
その勢力の絶倫と健康さはうらやまし
い限りだ。

五郎は快活で、あけつ放して、極め
て朗らかな性質だ。屈托なぞ何處かへ
忘れて来たやうな男だ。

「六代目をうらやましい存在と云ふ人
があるが、その點では君の方が以上だ
ね。六代目は脚本の選定まで手前勝手
には出来ないからね」と、云ふと、
「あツはツ／＼本當にさうかも知
れない」と五郎は云ふ。

大谷竹次郎でさへ、五郎の次狂言の
筋は知らない。

彼は、勝手なものを書いて、勝手に

上演して、高いお給金を頂いて、人氣
を獨占してゐるのである。役者として
これ以上の仕合せ者はない。

「もうそろ／＼いけないかも知ない」
と五郎は云ふ。さう云ひながら、彼
は如何にして將來を打解して行くべき
かの方法を頭に描いてゐる。一寸も畏

新劇壇

脚本専門雜誌
各書店にあり

定價一部四十セン

縮してゐない。先生は如何にして乗り
切つたらいかよく知つてゐるのであ
る。

そこで私も今一つ五郎の上につけ加
へやう——彼は、恐ろしい懶巧者だ、
と。

道頓堀年極め御購讀

一ケ年三圓十三錢

申込みは道頓堀編輯部へ

五郎劇雜感

山口廣一

明治から大正、大正から昭和へと時代は移り變つても、わが喜劇界は依然として會我廼家五郎の獨り天下である近ごろは東寶の古川綠波や淺草出身のエノケンあたりが五郎劇とはすつかり行き方の變つた新しい喜劇を見せてくれる、新しいといふ言葉に語弊があるなら當世風なといひ換へてもいゝが兎に角これらと比較した場合の五郎劇は成るほど古い、まことに昭和の笑ひでなく、時代遅れの明治の笑ひだといふ感である、それでゐて妙にいつまでも大衆的な支持を失はないのである、これは古いはずの歌舞伎芝居が今日なほ立派に命脈を保つて演劇の本流たる資格を失はないのと似てゐる、奇蹟のやうで奇蹟でない、次から次ぎと時代に則した喜劇が現はれようとも五郎劇は五郎劇として、あの一種獨特の笑ひの型は案外に恒久性を持つてゐるやうだ

古くともいゝものは何處までもいゝからである。

×
五郎は自分の芝居を決して喜劇だと呼ばないさうだ、喜劇でもない悲劇でもない、五郎劇だといふ、どうやらこれは一種の逃げ口上にもとれるが事實五郎劇は綠波やエノケンのやうに徹底したナンセンス風の笑ひばかしの芝居でない、笑ひもあれば涙もあり、教訓性を持つてゐる、成るほどこれが五郎劇の特質だ、だが一步コヂれると、これがまた妙に五郎劇を息苦しいものにしてしまふ場合がある、具體的にいふと五つの狂言のうち第二とか第四におかれた狂言が時にすつかり笑ひの埒外に外れてしまつて一幕殆ど涙の人情劇に終つたり變んな教訓劇に墮してしまふ場合がある、筆者は五郎劇ではこの

傾向を一番に採らない、五郎自身何んといはうとも五郎劇の観客はまづ笑ひを求めに集つた人達である、笑ひの少ない五郎劇ほど詰らないものはない、勿論、笑ひのうちにはほろりとさせる、笑ひのうちには人生の教訓を見せること大いに結構だが、それが度を越しては主観顛倒で少々困る、五郎劇はどつか肩が詰つていけないとの一部の非難に對しても、この點一層警戒して完璧を期してもらひたい。

×

五郎の舞臺を見てゐると、常に一種の精力的な壓迫感を感じる、これは五郎の人間としての性格の強さが無意識のうちに舞臺に反映してゐるからだ、これがまた五郎劇の一つの魅力になつてゐる、今日舞臺人多しといへども五郎ほど精力的な感じを受ける人はさうガラにない、強ひて求むれば歌舞伎で

の猿之助、落語界での金語樓あたりがやゝこれに近いといふまでだ。

それに五郎の頭の鋭さも彼の舞臺に接した人なら誰しも肯づく點だらう、卑近な例をとれば彼の舞臺での臺詞は常に變通自在である、昨日の臺詞と今日の臺詞と丸ツきり違つてゐる時が屢々ある、これは昔の口立て時代の習慣の名残りとも見られるが、時に應じ機に臨んで口をついて警句を吐く藝當は凡庸な頭の企て及ぶところでない、五郎の頭の鋭さである、奇智である。

×

五郎劇の長所もいろいろあるが、一座の俳優が幹部級から端役まで揃つて一藝の人である點、座頭としての五郎の統率力にも依るんだらうが、彼は常に助演者に恵まれてゐる、蝶六、大磯小次郎はじめ五樂、時右衛門、一朝、勢蝶、二三蝶あたりまでムラなく腕の

ある人ばかりだ、立派に藝で喜劇の出来人達だ、女形の桃蝶、時和、五月なども既に定評がある、これでこそ五郎の芝居は面白いはずだ。

餘談だが、五郎劇の端役といふと筆者はいつも蝶幸といふ女形を想ひ出す、瘠せこけてゐて出ツ尻で顔は奥眼で口が無闇と大きい、全身まことに畸形であるが、それでゐて娘形もやれば年増もやれる、老婆役も得意ならカフエーの女給や酌婦になると一種人と違つた妙な味を出す風變りの女形だ、五郎劇における畸形の蝶幸は奇聲の森野鉦治哉、舌を出す鈴木桂介、大兵肥満の市川團十衛門らとともに、まことに得がたき昭和劇壇の珍優である。





澤田正二郎を偲ぶ

—特別寄稿—

たちゆばり

長谷川 伸

澤田正二郎君が有名になつてからの願望の一つに、悠々と立ちゆばりがしてみたいといふ事があつたのは、微笑れもするし、實感がまことに添つて出てくる話でもある。

私の若いころの友人で、磊落な巡査があつた、私は一緒に夜の巡廻に助太刀のつもりで歩いたことが時どきあつた、或る夜のこと私は野原で、おらあやるぜといつて立ちゆばりをした、するとその磊落な巡査が起ちどまつたので、どうするかと思つて

みると、彼も又立ちゆばりをした、さうして何をいふかと思ふと巡査になつてから始めてやつてみたんだが、のうのうとして良い氣持ちだねあ、と。

卅年近い昔のことに、これも成つてしまつた。

澤田君の立ちゆばりが一度してみたいといふのは、有名になつた彼が、市電に乗れば人にたかられ、街に出ればぞろぞろ踵いてくる、さういつた境遇にあるものの、例を立ちゆばりにとつて何か釋放された場合を何となく夢想していつたとしても良い。變な話だが私にはこの小さな話が、いろいろの意味をもつてゐるやうで面白いのである。

澤田に愛された女

新谷誠水

澤田正二郎、役者一代僅かの間にあれだけの人氣をかち得た反面には女性の力が動いてゐる事が争はれない事實である。ほんとうの事、新國劇の出発點には、數々の女性が働きかけてゐた。

澤田クンがゑらくなればなる程、最前線に働いてくれた女性が、やがて大きな悩みになつた事も事實である。澤田正二郎をめぐると多くの女性、その中で最後まで澤田が愛し、女も又澤田を慕つてゐたのは、たつた一人の認められた二號としての神戸中檢の葛香であつた。

當時葛香には、神戸の實業家の頭だつた所で、プロペラと綽名されてゐるいゝ旦那があつた。

最初は役者と藝妓、双方のほんのちよつとした動機が結ばれて、ひそかな逢曳が続いてゐる時、葛香の不在中を家形入りをしたプロペラさんが、所在なき、鏡臺の抽斗から澤田との甘ひ手紙が現れて來た、のつびきならぬ證據の品、即座にマヅを言渡されて、兩親を抱へた葛香は途方に暮れて了つた。

この事を知つた澤田は速座に月々の手當を出す事を約束してこゝに初めて愛妾が出来る事になつたのである。

けれども經濟的にも頭の走つてゐた澤田は愛妾にいつまでも藝妓生活をさせて措く様な不合理な世帯をもたせなかつた、郊

外長田神社のほとりに、お父さんに養鶏業を營ませたり、葛香には藝妓屋をさせたりして生活の途をつける事を教へてゐた、愛妾とはいふものゝ當時の澤田の複雑な家庭生活の中にまき込まれて辛勞は大したものだつた、けれども持病の癪がつかへても、衣紋竿でつかい棒をこしらへて、獨り苦んでゐるといつた質の、をとなし性質はよくこれを持ちこたへて、澤田が唯一の慰めの人として、其かげに盡した功は偉大なものだつた。

澤田が晩年、本門佛立講の信者となつたのも此女の力で日蓮の訓しは宗教劇基督となつて舞臺へ現れたのもあつた。蠣殻町の病院に、刻々と最後が近づいた時、こつそりと神戸を立つて、病院近くの旅館に最後の對面を待つたのはこの女だつた。

許されて最後のみとり、澤田はひそかに満足をして眠りについたのであらう……

澤田歿後の葛香の生活はどうなつたか……花隈に營んでゐた藝者屋も、モウ一つ面白くなかつた、大阪へ出て森町交叉點で些やかなバーを營んでゐたが、これとても最近人手に渡して行方知れずになつて了つたのである。

新國劇が其後の隆盛、地下に眠る、澤田先生への爲めに記念劇を催す序でに、誰れか當時の事情を知つた座員の中で、薄命の葛香を慰めてやるものはないか。

そしたら、澤田クンは、地下に例の近眼鏡の底から眼を細くして我意を得たりと、こつそりほゝ笑むかも知れないのである。



あの 當時！

— 次 第 不 同 —

そ
の
頃

竹田信三

澤田座長を失つて後！

更生の基礎工事に一路邁進する人々と私は幸か不幸か袂を別ち今日ある新國劇創生の角座時代は劇團を離れてゐて其後復座したのは工事も落成に近い角座公演も終りの頃でした。

左様な譯で當時を語る何物も無く従つて云々する資格なきこと聊か肩身の狭きものを多々感じます。

道
頓
堀
！

正木與志雄

澤田先生も一度は身を投げた道頓堀

の河……捨ててこそ浮かぶ瀬もあれで座長を亡くして途方に暮れた多勢の座員達も座長の同轍を踏んで道頓堀を死場所を決め遙々東京から死出の旅路に下つた。

辨天座と角座——浮かび上つた岸こそ異れ救ひ上げて介抱して下つたのは二度共大阪の觀衆でした。私も一度は飛び出した劇團に歸つて來たのは若人新國劇創業の半で後れ馳せの勳平ながら皆んなに續いて一生懸命やりました。今日の隆盛は夢想だにしなかつたが一旦入手に渡つた田地田畑をもう一度何んとか取り戻して座長の頃の身代に挽回したいと明けても暮れてもそればかりでした。

何しろ若い者ばかりの火の出るような熱と意氣の舞臺で技も無ければ容も

無い銀紙を貼つた刀を振り廻す捨身のめくら劍法が今日への血路を斬り開いた譯でした。

昨日のように思ふ角座の苦闘時代それも七年の昔とわ成りました、ともすれば過去を忘れて今年あたりは東京で花見をしたいもの……なぞと、ほんたうに相濟まぬことだと思ひます。

子
供
心

長島九子

澤田先生が御存命の頃は、何方へ興行にまいりましても、別にどうと思ふ事もございませんでした。たゞお父さんに手をひかれて歩む子供の様のものでございました。ですから一番人氣のございました大阪にも、その頃は何と申す程の深い印象もございませんでしたが、先生がおなくなりになりましたが、先生がおなくなりになりましたが、苦闘時代には東京は申すに及ばず、あれ程人氣の盛にございました大阪さへも、前の人氣、賑ひさはなくなり、ま

つたく観客席の淋しさを痛切に味はひました。

けれど此の苦闘最中にも、矢張り大阪の公演は比較的成績がよろしゅうございました、それからだんだんと更生の實を上げてまいりまして、先生のゐらつしやらない新國劇を御見物下さる方が多くなつてまいりました。

それまでは、お客様に對しまして、何の感情もありませんでしたが苦闘時代を経てはぢめて、何とも申様のない親しさを覺へる様になりました。

構造の關係もございませうけれど、舞臺へたちましての感じは、大阪の劇場の方が、舞臺と観客席とを相ひ通はせるものがある様でございまして、お客様の氣分の中へびつたりと溶け込んでゆける様でございませう。私共は大阪へ興行にまいります時は、東京をはなれて旅へ出る事になるのでございませうが、そうした氣分の點から申しまして、別に何とも氣苦勞に思はれませぬむしろ樂しみになつてをる位でござい

ます。

四月はまた大阪公演にきまりました。今度の出しものゝ中で、「上海」は、ずつと以前に浪花座で上演いたしましたものでございますが、大阪のファンの方々の御希望に依りまして、再演いたす事になりました。此の中で前に久松先生のお演りになりました賣笑婦おはまの役を、今度不肖私が演らせて頂く事になりました。

再演のものでございますだけに、果して皆様のお目にかなふ様、全う出来ますかどうかと案じてをります。上演の上、お氣付のところは、どうぞよろしく御指導、御鞭撻下さいます様、道頓堀の誌上を、拜借いたしましたしてお願ひ申上げます。

太入の關西公演

初瀬音羽

東京で不入つぎのあげくの關西公演で連日満員がとてもうれしくおもは

れました。その後も大阪へゆけば、お客様の心配がないといふ安心がありまして早く東京でもこんなになつてくれなばよいのにといつも大入のお客席をながめてはおもつた事でした。

浪花座公演

丸茂三郎

小雨が寂しく降つてゐた。

ネオンサインも消えて流石の不夜城道頓堀も夜の闇に征服され様うとしてゐる。

劇場小屋映畫館は勿論附近のカフェーもトツクに店をシメ歸りを急がぬ附近にでもゐるのであらう二人三人と一組になりブラ／＼戎橋筋の方へ行く女給さん連が白粉を匂はせ僕の前を通つて行つた。霧雨に似た小雨に濡れて僕は浪花座の表に立つてゐる自分を見た打出して樂屋口を出る前から今夜はよく表を見ておかなけりやならないと心に決めた。

澤田先生歿後始めての來阪浪花座の終日だ。

樂屋で皆が噂をしてゐた。

「もう大阪へも來られないかも知れない來ても道頓堀へ出られないだらうあの入ぢやーな……實際お話にならない程這入らない毎日々見物人より樂屋の座員の方がおゝいんだから……」この話を聞いて成程もし來ない事になつても心残りのない様に部屋と云ふ部屋を殘らず見残しの無い様にと思ひ見て廻つた故座長が何時も這入つて居られた部屋の前に立つた時目の中が熱くなつてピンボケの寫眞を見る様に終には何んにも判らなくなつて了つた。

「馬鹿顔して變な人私を通るののいてゝなア……」酒クサイ息をブンくさせた宗右衛門町邊の藝者さんであらう僕を突きおける様にしてキャツ／＼笑ひ乍ら小雨の降る中を傘もサ、ズに通つて行つた。

辰巳とか云ふ奴良久澤正に似てるで

？島田とか云ふ奴も一寸えゝ處あるで？こんな噂話を角（角座）の歸りに聞いた。

角座へ行けへんか新國劇が來てるやろ。駄目澤正が居らへんのに阿呆等しうて見てられへんがな。

辰巳の月形澤正ソツクリやな國定忠次も良え、よう似てるがな。

本當やな、良え處あるで

角座へ新國劇が來てるで早よう行かんと見られへんぞ、自分は島田が好きや良え處あるやろ

自分は辰巳が好きや何んでも好え早う行こう。

道頓堀を歩き乍らこんな事を話してゐるのを聞いた時僕等は二回公演の疲れた軀を休ませる暇も無く角座の客席表二階休憩室で終演後の十一時頃から三時四時頃迄狂言の稽古をしてゐるのだ。

ある二の替りの時、稽古疲れて、出場を待つ間の四五分を、かつらを脱い

で一寸横になつてゐたら、丸ちやん／＼と自分を呼ぶハツと思つて立ち上るなり傍にあつたかつらを被るのと出るのと一緒な位い早かつた。

支那街の夜で青い電氣だけで舞臺全體が薄闇の感じ舞臺へ出るとハツキリするセリフを二言三言云つたがどうも變だ相手も何んだか變な顔をしてゐるその内にハツと氣が付いたのはかつらだ、先刻横になる時脱いだんであわてゝ被つて來る時もしかすると……さアそう思ふと心配だ今にも客席から大きな笑ひがおこりはしないかとそればかり氣になる。

軀へ冷アセを一杯だ一度這入つて今度出ると三枚目の立廻りがある一度這入つた時侯と入れ違ひに出る人が變な顔してどうしたのつて半分／＼の言葉をつかわれた變な顔の管僕はかつらを反對サカサマに被つて出てゐたんだから……

小雨の降つた晩酔つた藝者さんに馬鹿顔して變な人と云はれた同じ大阪道

頓堀で同じ變な馬鹿顔でもこの時の顔には更生の悦びがあふれてゐた事であらう。

我然！反響！

小川虎之助

今年の三月四日は寒かつた。

戒厳令と、あの大雪の後なのでいつもは静かな谷中の墓地も、今年は何んともなく重苦しく、残んの雪が一層、肌寒く感じられた。

三月四日を東京で！

只それだけの念願から、旅へ出る筈の新國劇が、帝國ホテルで芝居をした澤田先生を偲ぶ夕べと題して、狂言も「桃中軒雲右衛門」「父歸る」「無籍者」「杏掛時次郎」の四種を選んで。眞山先生の雲右衛門は、金剛石の徑一寸にも似たる名篇だ。毎日舞臺で島川君の雲右衛門が、我ながらよく、あの中を生きて來たと思ふ、クオレの今日あるは艱難だ、貧乏だくと叫んで居る僕は松月爺さんの役で出を待ちなが

ら、毎日あのせりふを聞くと過ぎ越して來た、新國劇の姿を想ひ浮べる、そして、ク噫、よく生きて來たクと思ふのです、先生に死なれた翌月(四月)ヤハリ此浪花座で追悼公演をした、ケレドお客は來なかつた。舞臺から見る客席は空々寂々、椅子に掛けられたシートばかりが、闇の中に白く眼について世は春だと云ふのに、私達の心は暗かつた、其翌年の正月には、元旦だと云ふのに開幕して數十分、一人の客も來て呉れぬ。

ガランとした市村座の舞臺で、島川君と僕とが芝居をして居る、狂言は日清談判、僕が高利貸で、島川君が相棒の執達吏、お互ひに顔を見合はせて泣きも出來ず、笑ひもせず、いくら芝居を運んで行つても、見て呉れる客は一人も居ないのだ、情けないのか口惜しいのか、お互ひに噺ばかりが熱くなつて名狀しがたいあの時の氣持ち！死んぢまいたい様な、ヤケクソな氣持ちさへ手傳つて居たやうだ。

其内に表方が近所の子供を集めて來

た。マダ足りない、今度は親供迄狩り集めて來て客席へ並べて呉れた。

五月になつて大阪の角座へ、最後の突撃！さうだ、全滅を覺悟の



最後の突撃だ。午前十一時から、午後十二時迄全員、大役も端役も引受けて血と汗の奮闘。

樂屋に居て、舞臺の活氣を感じたのは、僕はその時が初めてだつた。

物凄、あの初日の意気はどうだ！
花見の場の立廻りで、ある人は鬘を
飛ばし、或る人は張物を蹴破つた、辰
巳君は足を踏み抜き、島田君は、白野
の鼻を落とす。

俄然反響はあつた。先生の新國劇を
育て上げた大阪のファンは、今又、此
の孤兒新國劇にも、温情の床を與へて
呉れた。苗木の新國劇は、再び大阪の
土に更生した。

雲右衛門劇の松月老人は、浮月の廣
間で酔つぱらつて、價千金の春の夜を
泉水の音に耳を澄ませながら、シミジ
ミといふのでした。クあゝあ、私しや
生きてよかつたねクト

此七年を振り返つて私もク生きて、
よかつたねクト本當につぶやきました

必死の構へ

二葉早苗

澤田先生が亡なられてからもう七年
の歳月が立つてしまつた。

つい此の間の事の様な氣がしてゐた

のに――

あの頃の私達先生を失つて今後何う
して立行けるのであらう。

依藤理事、座員一同の必死の市村座
公演も不入つゞきの憂目をみなければ
ならなかつたのです。

その内大阪角座へ初出演と決りまし
た、先生の旗上げの地大阪私達に取つ
て此の公演こそ劇團の運命のきまり時
なのです。

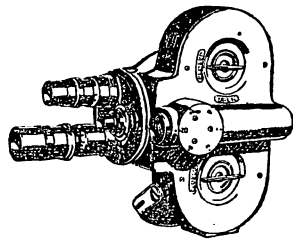
私達の苦衷に同情して下さつたのか
はじめての大阪公演は連日満員の盛況
だつたのでした。

亡き先生も成功を納めた大阪の地、
やはり私達の心情を買つて下さられたの
でした。

あの更生當時より七年、一年の大半
は大阪公演となる程大入をつゞけて居
ります。

それにしてもあの頃の眞剣な意氣組
をいつまでも忘れず私達一同良いお芝
居を皆様へ御目に掛け度いとそればか
り思つて居ります。

フィルム



(早進グロタカリあに店ラメカ流一國全)

BELL & HOWELL CO. U. S. A

十六ミリ界の 最高峰

未だ曾てフィルムモカメラ
で影して失敗があつたか
? 未だ曾てフィルムモカメラ
で一呎のフィルムが浪費
されたか? フィルムは映
畫になると同時に最も優
秀なるカメラマンを兼ね
ボタンを押し給へ貴下の
なされる事は唯それだけ
だ



私の女房役と 劇團の變轉

(6)

都 築 文 男

昭和三年の六月神戸港座興行に失敗後九月迄休演、十月
籠寅の手で木下(吉)、大井と合同して三宮歌舞伎座から廣
島新天座、徳山座を打つて、十一月名古屋歌舞伎座にて木
下八百子と合同して新愛知連載小説「夕陽の道」を演じて
大成功に終り、近郊を巡業して、翌四年正月大阪辨天座に
て山口脫退の新潮座を新潮劇と改め、私その他に小笠原、野
澤、女房役には三好榮子、小松孝子、浪花千恵子、若宮美
子等、「珠を抛つ」「敵討龜山噺」「饗宴」等の狂言にて
大入を占め、三月はその一座で樂天地、四月は港座、五月
樂天地の時、中座へ東京大新派が來た。新派復興の爲にも
と樂天地で大々的の後援會を組織して聲援したものだ。

七月には吾新潮劇に、小織、藤村、高田亘等の合同を得て
角座にて「黒潮」「戀のヂヤズ」「傳馬問答」等にて好評を
得たが八月樂大地で遂に新潮劇も解散した。

以來翌年の五月迄全くの旅役者一座には筒井徳二郎女房
役には守任菊子、名古屋を中心としてその近郊、遠くは金
澤福井、土佐の高知迄渡り歩いた。七月になつてやつと古
巢の樂大地に歸つてきた。

八月には小織、木下(八)と合同して栗島狭衣氏發案の
話の芝居を角座にて上演。

昭和五年十一月、新派愈々擡頭の熾然し東都より伊志井
寛、梅田重朝を迎へ、第一劇場より女房役として石河薫、

東愛子、米津、浪花、木下(吉)を加へて時代に相應した刷新の新興成美團が誕生した。

當時最も普及した「女給」「この太陽」「明眸」等を

上演しその近代性に富んだマンネリズムより脱した新派團として漸く注目されるに至つた。就中まだら足袋の狂言中

主役の伊志井寛が盤帯を痛めたので代役を自分が貰つて出た。下級の代役が上級から出たと云ふので當時色々話題にも昇つた。

翌正月浪花座に昇格して、藤村三好榮子、其他若手女優

数名の加入を見、大毎連載の「銀河」と鳥江鐵也氏の傑作と稱する「堀江物語」「妻吉殺し」を演じて連日連夜の大人

満員。二の替りが亦連日賣切の好況、南地日柄喜で大入祝賀會を催す始末、二月の京都神戸がまた好評、三月の角座

興行を控へて中央公會堂で『成美團の夕』を開催した。即ち一座俳優の餘技大會のやうなもので、一部番附を拾つて

みると、

14 清元 唄 藤村
三千歳 三味 高田

20 17 義太夫 伊賀越沼津 伊志井 寛
哥澤 都 築

23 不如歸 浪子 藤村
(海岸の場) 武男 石河 薫

船頭 進 藤
伏見(子役)

(但しこれは都築と木下吉之助氏が黒んぼになつて科白を喋り、出演者は傀儡だつた)

25 鞘當 東 愛子
名古屋三左衛門 石河 薫

不破數石衛門 米津 左喜子
留男(女)

等にてその着想の妙を以てあの大公會堂も揺がすばかりの盛況振りだつた。

四月は神戸と京都南座、五月が東都から喜多村河合來阪し十六年振りの顔合せで、晝夜二部制で新興成美團と合同した。(晝)母三人、眞景累ヶ淵、(夜)有憂華、假名屋

小梅等、小梅の配役は、小梅(河合) 宇治一重(喜多村) 茶屋の女將(木下吉)

兼吉(大矢) 銀之助(都築) 藝妓(石河薫)の超豪華版。十五日の芝居に十八の大入が出たのだから當時の盛況は首肯出来る。

六月は此一座で神戸、岡山劇場を三日打つて京都南座へ乗込と云ふ前日、河合氏が病に倒れ即日歸京してしまつた爲に南座興行に破綻を生じ、喜多村氏の俠艶録に狂言を替

えて、母三人の河合氏の役を木下(吉)氏、木下氏の役を東愛子がそれ／＼代役して終演した。

翌六月は喜多村氏に代つて井上正夫氏一派と合同成り同じく二部制で(晝)「野に叫ぶもの」「御婦人は何かお好き」(夜)「最後の審判」「突破先生」「新婚道中記」等にて連日好評を博したが、七月に入つて、井上氏は去る、此處に成美團單獨興行でわあまりにも飽満した観衆に對し惨めな存在となつた、此の月京都座で以て遂に解散した。新派開拓の爲には誠に惜しい劇團だつた。

昨日の榮華は今日の夢、再び九州巡業の浮草、不入の爲に衣裳、鬘を太夫元に差押へられ門司から船賃を篤志家の袖にすがつて座員を連れて歸つて来た事もあつた。

翌十一月七月初日で小織氏と共に名古屋新守座で伊井友三郎氏一行と合同した、此時に現一座の若集蘭子、藤田さん子、千代子姉妹を女房役に持つた。武田正憲氏も此一座に加はつてゐた。

狂言は「野に叫ぶもの」などで、岐阜劇場を最後に伊井氏は東都に歸る。あとを引受けて再び新守座で、「傳馬問答」「煙筒」「中村入尉」等。當時、滿洲事變勃發の當初だつた。

悪い事はよく續くもので、旅興行の御難の疲れも癒えぬ矢先、小織氏と同泊の喜代之旅館に突如姿を現はしたのが前年故人になつた門脇陽一郎氏であつた。
これが自分と小織氏とを今尙續く悲境のどん底に突落された、所謂乃木劇の發端である。(次號につゞく)

下 駄 奇 譚 (一)

大 概 た も つ

中座の表の人……
バレてから残つて
ゐる下駄一つ……
まさか舞臺のでは
あるまいが……。



讀者寄稿

延若長三郎禮讚譜

谷 惣之助

關西俳優の中で私の好意を持つてゐる人に延若と長三郎がある。雁治郎没後の關西、それは延若梅玉、魁車に依つて當然爲さるべきであるにも關はらず、一向それらしき事も爲し得ず、徒らに身賣りはやりの昨今ではある。關東に比して脚本の沸底も首肯出来るがそれよりもつと延若に働いて貰ひたい。この人やたらに演り過ぎるので雁治郎の特選的なものもなく所謂器用倒れに陥つてゐる。

雁治郎でもそうであつた様に延若でも其特長は上方式に世話狂言にあると思ふ。時代物にも數々の傑作はあるが其人の味と云ふ點から云つても……延若に演つて欲しいと思ふ物の裡で「梅忠」「油地獄」がある。雁治郎とは別個のいゝ味をもつてゐるだらう。雁治郎の模倣が必ずしもよいのではなく個性に依つて築き上げられたものなぞ尊ぶ可きであり、推賞すべきである。

それに何が故に扇雀のそれが迎へられるかあのモツチャリした中に何とも云へない上方情緒を含んでゐる艶物は、延若に依つて代表される可きであると云つても過言ではない。

梅玉、魁車に遠慮の故が、松竹の政策の故か、私は解釋に苦しむ者である。徒らに東京出張ばかりが能くもあるまい。眞の意味の郷土藝術をそれてなくてさへ、閑古鳥鳴く關西劇境に提供して欲しい。

次に長三郎の不遇は雁治郎没後甚だしい。忘れられんとしてゐる存在である。病身勝ちな人丈に同情に堪えない。それに引きかえ利巧者の扇雀は我童、勘彌等とのコンビで今では凡んご水準に近いものとなりつゝある。

或る人は云ふ、長三郎は雁治郎あつての長三郎だと成程そうかも知れない。「大晏寺」の新七「基盤太平記」の主税にしても確かに其感はある。併し彼には勝れたる舞踏があり涙ぐましい熱演がある。舞踏も六代目の度々の來阪に依つて幾分縮少視された感もあるがまだ「延びる素質もあり、研究次第では關西の六代目ともなる才能は充分持つてゐる。熱演に就て思ひ出すが、昨年六月南座で長三郎の伊左衛門を見た。あの弱々しい線から流れる熱演に涙が出る程感激させられた。

一般の批評としては無難と云ふ程度だつたが私として盛綱のセリフではないが「ほめておくりなされ」と云ひたかつた。

扇雀とは違つた彼には歌舞伎俳優としての品位もあり、純眞さがある。

演技の點になれば成程扇雀に一步譲られねばなるまい。併し何故か扇雀にはもたれない好

感が長三郎にはもたれる。

この人の物と云つてはまだ「未完成だが」「河庄」なんか演らせたなら面白い事だと思ふ。

延若の缺點を償ふ丈の艶物は彼に依つて初めて生れて来る事だらう。肥軀瘦軀共に益々自重の上精進されん事を祈る。

阪東壽三郎

大西 武夫

永い間、京の土地を離れて居て關西の芝居に遠ざつて居た私が、久方振りに歸つて來て特に目についたのは、阪東壽三郎であつた。

雁治郎死して、延若、梅玉、魁車と群雄相競ふ關西梨園に於ける、一方の宰主としての其の地位も向上し、又それ丈けに藝も圓熟して來た壽三郎は、確かに注目に價する。

もともと、壽三郎は私の好きな俳優の中で第一に指折る人である。

が、俳優であると云つても、必ずしもその藝のうまさも感服して居ると云ふ事ではない少くともその藝の巧みな事に感服して居ると云ふ點から云へば、私は壽三郎以上の數人の俳優を例へば菊五郎、吉右衛門、梅玉、或は延若を擧げる事が出来る。そして、之等の俳優がその顔、聲、技巧等に如何にも俳優らしい感じや、味はひや、巧まきを持つて居るの

に較べると、壽三郎のそれ等は如何にも素人らしいと云ふ事が出来る。

云ひ換へれば、壽三郎は歌舞伎俳優らしい色彩の薄い、歌舞伎の因習に捉はれる事の少ない俳優である。

その壽三郎の素人、素人した所が、たまたま私に好ましく思はせる。

然し、壽三郎の藝風には目立つた特徴がない。際立つて嘆稱に價するやうな巧みや、味はひが少くない。例へば吉右衛門の型物とか菊五郎の二番目物、舞踊と云ふやうな極め付の技藝を彼の内に見出す事が出来るだらうか。源太勘當場//の平次、//七段目//の平右衛門//近江源氏盛鋼館//の和田兵衛、又は最近の//涙の四ッ橋//の染之助等と思ひ出す、役々の中に彼の特徴を、餘人の追従し難い巧みや、味はひを探つて見る。少くとも彼は二枚目役者ではなさそうである。それならば型物役者が、三枚目か、或は又新劇役者か、私はよう斷言はしない。

あの鋭い三白眼、厚手な唇、太い眉毛、それは決して歌舞伎俳優らしくない堅い顔である。頑丈そうなその身體、それは形の上から見ても、感じの上から立つても少しも役者らしい所はない。舞臺姿は歌舞伎美と云ふものが缺けて居る。即ち顔とか、聲とか、柄の點から云へば彼は俳優として決して先天的に恵まれた人ではない。

更に歌舞伎俳優としての要素に於いて、彼に缺けたものは踊りの素養である。此の點を先に擧げた柄、顔、聲とは歌舞伎劇に於ける彼の役柄の範圍を大變狭めて居る。

が彼には嘗つて第一劇場を率いて立つた熱と意氣と芝居に對する眞面目さがある。一人よがりの芝居をしない點、舞臺を捨てない點、其處に彼の長所がある。

近時、その一本調子な、線の太い藝風が左團次に似て居るので、左團次の演じた芝居を頻りと上演する。が、左團次を追へば左團次たり得ても、左團次以上になる事は難かしい。殊に壽三郎は、豪爽明快な左團次の藝風に及ばざる所があるとは云へ、彼の舞臺には右團次には見出し得ない痛心泣血の様がにじみ出て居るではないか。彼は役の傀儡とはならず、よくその役に心を盛る俳優である。

//お國と五平//に大變好評を得た彼は//嘆きの天使//に於いても非常に成功した。私はそこに彼の行くべき道が見えて居る様な気がする。

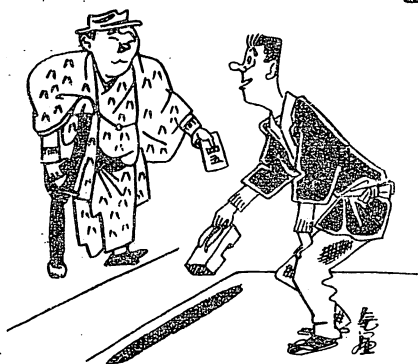
湖落期にある關西劇壇の爲に、大きくは日本演劇の爲に好漢よく自重せよ。

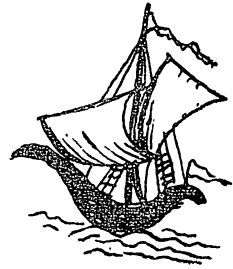
× × ×

下駄奇譚 (二)

大槻 たもつ

これで問解は題決……。





劇評と劇談

歌舞伎座 と中座

(三月の劇評)

西尾福二郎

二月末の東京事件が祟つて三月の芝居は何處とも興行成績は香しくなかつたらしい。昨年以來連月好調の波に乗つた歌舞伎座は、今月も亦菊五郎延壽のコンビで凱歌を高く奏でるかと思はせた。役者は手揃ひ、狂言は粒選り、これで來なければ見物の方が何

うかしてゐるのだ。所がその見物が前記の突發事件の餘波を食つて出足が鈍つたのだから、これは何うにも仕方がない。純粹な江戸前の味が大阪の見物に理解されなかつた譯ではなく、原因はもつと外にあつたと私は思つてゐる。

扱て一番目の坂崎出羽守には人間菊五郎の味がそのまゝ出てゐて癪癖強い大將が家臣を思ひ案する情愛深い一面が脚本で讀んだ許りでは理解し難い點迄ハッキリと滲み出させてゐた。然し山本氏特有の緊密な組織をもつたこの一篇から序幕の第二場をカットしてしまつた許りか、第一場の幕切れに坂崎を一寸出すだけで、最初の伺候の場を省いてしまつたのはいけぬ。道具も第二幕の船はやゝ散漫だし第三幕の茶室は餘りにお粗末

だし、終りの出羽守邸は奥行が無い。大きな舞臺を極度に利用しやうとした意圖は認めがその割に消化不充分的憾みがない事もない。この反對に大きな舞臺に禍されて何うにも終末に困つたやうだつたのは新三内の場だ。しがない髮結びの裏店住ひとは何う安く踏んでも受取れない。「言葉々々々」と云ふ事が戯曲のお呪ひみたいに稱えられる折柄、私は歌舞伎座のお芝居を見る度にそれと同じ意味で「舞臺々々々」と云ふ事をいつも感じさゝれる。

髮結び新三は季題に魁け過ぎたが江戸より先に浪華で味はふ初鱈の美味さが感じられる。白子屋と永代橋との間に河岸の場があるのを抜いてゐる小粋な髮結び稼業の入墨者と云つた感じは菊よりむしろ

羽左の物だが、形の點はとも角として演る事は斷然この人が巧い。だが浴衣をきて出てきた形は何うも初鱈に身代を擦るやうな柄ではないと云ふ岡さんの見立が成程と思ひ出される。見せ場は何と云つても新三内の場で、源七との詰め開きから家主とのやりとりがあつて、お熊が善八に連れられて戻る時、上手の柱に凭られた新三が不逞腐れた風で顎を撫で乍らちつとお熊の體の或る一點に眼を注いでゐる。

この邊に菊五郎の見せ場がある。彦三郎の源七は初手から新三に食はれてしまふ人のやうだ。友右衛門の主家は構えからして隠居じみて老猾の感に乏しい。三津五郎の善八は好適。兎角云ふものゝ、要するに菊五郎の新三が餘りに光り過ぎて他の人の演技が消さ

れてゐるからなのだ。

保名は前回よりも更らに單
化されて愈々風韻が加はつて
きた。背景が一抹の春霞に暈
され、終りに櫻花の散る條り
が無かつたり、その他所々に
氣分劇らしい取扱ひが感じら
れた。

×

×

中座は珍らしくも井上と壽
三郎の顔合せ。この二人なら
相當面白い芝居が見られると
思つてゐたが、忌憚なく云ふ
とどれもこれも間に合せと云
つた感じのものが多く、練り
に練つた揚句アツと思はせる
やうな力演物が見當らなかつ
たのは残念である。

鐵の銜は吉田氏の装置がよ
く出来てゐたが、手押れすぎ
た爲かこの作者獨特のギャグ
が多すぎて一途に盛上らうと
する悲劇味を疊させた所が

ある。新劇的な構成（舞臺装
置だけではなく）になり切ら
うとして、新派的な組立てか
ら脱しきれない所がやゝ嫌り
ない。清水の好演は藝ではな
く持前の味で見せ、竹久の異
色あるモガは生硬だつたがこ
れはもつと持味を出した方が
よくはなかつたか。芳子が令
嬢で新派芝居へ顔を出したが
一座した大和家の遺孤の例も
ある事だから何でも彼でも今
の内に勉強しておいて損はな
い。

己が罪は名題から考へても
女主人公環の芝居であるべき
だが、今度の出場は作兵衛中
心の後半だけで、折角舞臺に
返り咲いた岡田嘉子に期待し
た見せ所が無かつたのは惜し
い。どの場もこれから環のお
芝居にならうと云ふ所で消さ
れてゐるのだから氣の毒だ。

駒下駄て何や

妹脊平三

肥後の駒下駄が中座に上演される、と二十歳代の連中には
そのコマゲタがわからない……だつて三十年振りの上演
ですからナ



その代りと云ふ譯でもあるまいが、嘉子の環は衣装の好みに洗練された所をみせてゐた井上が獨立するに就いてはこの人邊りが最も恰はしい對手役として、將來は映畫よりも舞臺の人として働いて欲しい井上の作兵衛は一見無技巧に見へてその實巧まざる巧さを隨所に見せてゐた。叩き込んだ藝の味と云ふ物がよく感じられる。秀調の遺兒二人がこの劇の楔たる玉太郎と正弘とを演じ、兄は伸々と弟はおつとりと、何れも素直な芝居をしてゐた。

國芳の出世は圖らずも作者豊田氏の出世を意義づけた作品だが、初演當時の松岡映丘畫伯の装置に大部助けられてゐる所がある。壽三郎と左團次、霞仙と我童、小太夫と延若、嘉久子と松蔦?今度と初

演の時との役割をかく比較してみるに、これは役者の上手下手の問題ではなく、東京と大阪の役者の持味による問題である。委しい事は云はぬが左團次物必ずしも壽三郎の物とは限らないのだから、第一劇場再興の噲の折から、改めて壽三郎の自重を希望しておく。

その時折りの記

大橋孝一郎

同じ新しいものをやるなら、せめて井上のやつた「海鳴り」程度のもを見せて貰ひたいと思ひます。三月に前進座が藤前成吉の「シーボルト夜話」を取上げたことも、此の劇團の向上のために譽めらるべきことでありませう。

然し私は藤森氏が此のお芝居を面白く仕立様としたことが禍ひして返つて私達の感興を削いだことに氣付かねばならないのです。その何處と云ふのは第三幕目に當つてゐる自殺の件なのですが、私はあゝまでしてシーボルトに劇的境遇を與へる必要はないと思ふのであります。而も科學者である彼が最も非科學的な方法で自殺せんとする愚劣さを此の作者に詰るものです。またこの第三幕目のためにおたきと云ふ人物が此の作品の全體の彩りとはかけ離れた色合となつて目ざはりな存在となつてゐることも事實です。私はこの劇團がこの脚本を取上げた意圖なり勇氣なりには敬服できますが何故もう一步つき進んで此の三幕目を改訂する冒險を敢てしなかつたかと云ふ點即ち興行的羈絆を脱し得られなかつた點に不服を抱くものであります。

○ 「忠臣藏忠矢刻」は演出時間幕なし二時間半の大改訂にも拘らず、歌舞伎レビューとでも云ひつべき一ツの様式を備へてゐる點が目新らしく思ひました。而も原型尊重の的をはずしてゐないところは流石に古典に造詣深き渥美氏の手腕の致すところでありませう。俳優も殆どが二役三役と受持つてゐるのですから、並大抵の苦勞ではありませぬ。其の上晝夜二回の興行ですからたいへんな勞働と云へるでせう。かゝることは熱を賣り物とする此の劇團の人々に限つてのみ可能なことで、その意氣こそは譽めらるべきでありませうが、一方若しかすれ

ば此の人達の舞臺藝が荒んで行くやうなことがあるはしないでせうか。どうか私のこの危懼が幸ひに無駄であります様に——。俳優の中では翫右衛門の進境目覺ましく、含蓄ある演技を示して一人でひつさらつてゐるかに見受けました。

○

六代目の「坂崎出羽守」を観て感じたことですが、此の劇の主人公は約束を裏切られた男の心理を取扱つたもので飽くまで究極まで突進んで行つて終に憤死するに至る出羽守の性格は全然六代目自身の姿の様です。(これは彼自身も云つてゐることなのですが……)處が左團次の杏花十種の内になつてゐる「佐々木高綱」も約束を裏切られた男の心境を取扱つたものですが、

高綱の方は「こゝにもまた悟られぬ人がある」と皮肉な笑みを浮べる諦觀的な人生觀を抱いてゐる人物となつてゐますが、これがまた左團次の人の姿がその儘に描かれてゐる様で興味をひかれます。そして、この二ツの狂言から押量つて兩優の性格を思ひくらべて見ることも面白いことです。

○

「髮結新三」は默阿彌時代の時代色と、江戸ツ兒氣質とが理解できれば未だ未だ面白く見物出來たにと残念です。私達關西人には本真うの江戸ツ兒氣質などは判らないのが當り前でせう。それに近頃はメツキリ地附きの江戸ツ兒と云ふものが尠くなつて終つてゐる今日に於ておやです。例へば此の芝居で主要な小道具

の役を務める「初鱈」の江戸ツ兒的價値と云ふものも全く私達關西人には理解出來ないものであります。臺詞にしても「方言の洒落」なぞ關西では困つたものだと思ひます。従つて私達は此の芝居を見て只器用にまよめ上げて行く六代目の至藝や、友右衛門以下の熱演振りや、新三内の場の幕切れ脚色のトリツクの妙なぞにのみ陶醉する外はないと思ふのであります。

○

六代目の至藝は既に天眞的な素質によることは勿論ですが、團十郎や先代菊五郎の薰陶しろしきを得た事がその根本的な基礎となつて今の彼の舞臺に、大きな見えざる力となつて働きかけてゐることは事實でせう。私は何時も六代目の舞臺に接する毎に、偉

大な團、菊の非凡な功蹟をひしひしと感ぜずには居れないのであります。そして六代目の背後に團、菊の觸手を感ずるのです。御覽なさい「保名」の陽炎燃え立つ春風駭蕩たる一面の榮の花畑の間を縫つて故兩名優の精神が躍如としてゐるではありませんか。

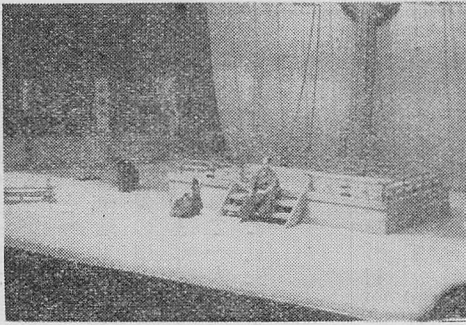
道 頓 堀 五 月 號

五 日 發 賣

乞 ふ 御 期 待 を

道頓堀 ライカ

行脚・(三月本誌特寫)



★歌舞伎座(菊五郎一座)

・1・ 六代目の出羽守は奥深い腹藝一途で各場面を引きしめて行くのは流石である。グーツと押へ付けた演出を最後の幕で爆發させてサラリと死んで行く緩急の巧さは此の人をおいて他には求められない巧さだらう。友右衛門が忠實にまめまめしく立廻つてゐるのが好

感を持つてゐる。

・2・ 保名的一幕。正に二十分一瞬の保名である。延壽太夫の艶々しい美聲が場内をより一層春らしい氣分に包むのだ。
・3・ 髪結新三的一幕で六代目は親護りの器用さで髪を結び上げるマゲ時代にこれを見れば、その手先の鮮かさが本職と比較が出来て

面白いものを……。新三は此度で

はまだ小悪黨の性根を現はしてはゐない。

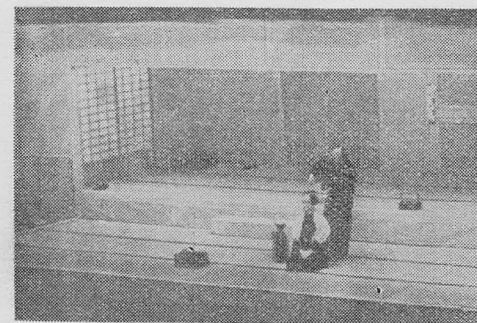
・4・ こゝまで来ると立派な悪黨だ。黙阿彌調の臺詞「ふだんは帳場の髪結び廻り！」と耳に心良く響いて来る。江戸前獨特の味だ。
・5・ 最後の幕が三社祭で賑やかに打出し。「早い手玉や品玉と……」



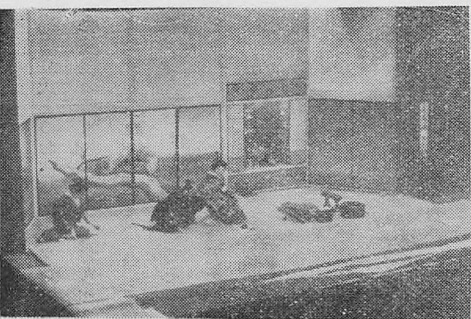
このコンビ特有の輕妙な手ぶり足
ぶみがえも云はれない浮き立つ調
子で心をゆさぶる。寫眞はその幕
切れ「消えてあとなくなりにつ
れ」ときまつたところ。

★浪花座(前進座)

・6・ 拾二時忠臣藏は色々な方面
からして面白い觀ものだった。此



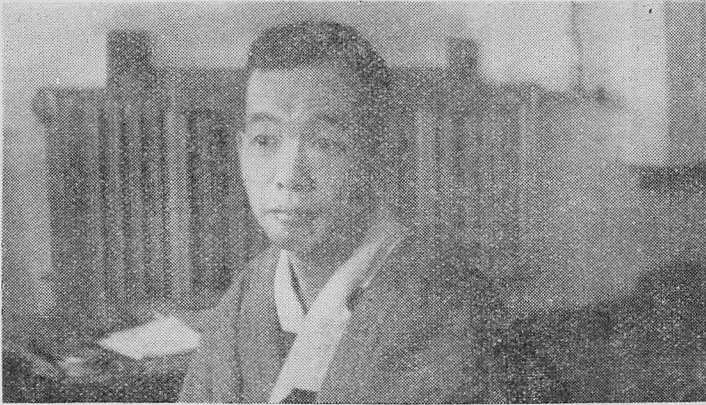
の場面は成駒屋の十八番だった
『南部坂雪の別れ』の前場に當る
ところで成駒屋追想の一幕だった
。長十郎の由良之助は熱演だが年
巧が足りないので未だ未だ重厚さ
が不足である。しかしゲンゲン仲
び上つて行くところに此の人の將
來を囑望させる。



・7・ 小山田庄左衛門の件りだけ
は近代劇としても不自然さなく通
用しやう。甌右衛門も進境目覺し
く、他の持役共に大當りだったの
は讚めらるべきだ。國太記のお雪
も可憐なうちに十分の色氣あり中
々樂しめる舞臺だった。

(大橋孝一郎)

● 景 風 屋 樂 劇 庭 家 ●



(1)

● 二 寛 田 須 (寫 特 誌 本) ●

笑ひの常勝軍「家庭劇」の樂屋風景。四月にも間近い樂屋の陽氣は昨日までの暖房装置の名残りを未だ幾らか止めてゐるせいか、どうかすると冬の洋服では暑さを感じる程の温氣だつた。丸一ト月を京都で打續けた此の劇團の何時も乍らの潑刺たる若鮎の様な人々の姿をキヤメラに収めんものと此の樂屋を訪れたのだ。

舞臺では四番目の「黄金狂」の幕が開いてゐるのだが、觀客の笑ひ聲も下座の囁きも此處へは少しも響いて來ない。全く別天地の觀がある。それに西に面した部屋は四條通りから京極にかけ、また東に面した部屋は東山一帯の風光を一目にあつめてゐる點、南座ならでは、イヤ京都ならではの樂屋の味合ひがでないであらう。

最初に訪れたのは山田隆也氏と

高田亘氏とのお部屋。ドツシリと化粧鏡の前で顔を作つておられる山田氏からフィルムには入つて頂く。(寫眞・2・) 次いでそのとなりで坐つて居られる高田氏だがこの方山田氏とは打つて變つた氣輕な方で

「どんな格好がいゝでせう?」

と色々芝居氣たつぷりな表情をされたが結局一番大人しいポーズになつて終つた。(寫眞・3・)

その部屋を失禮してカメラは浪花千栄子さんのお部屋へと進むが女優さんの部屋へはごうも小生テラです。が其處を本誌の爲とハツパンして扉を押す。

「寫眞なら一寸これちやア餘ンまりです」と早い所で髪かたちの修繕。で僕も早いところシャターを切つて愛嬌満々たる千栄子さんの



(2)

部屋から引下つた。(寫眞・4)

その時丁度舞臺が終つたのか天外氏十吾氏石河嬢などのお顔がゾロ／＼と樂屋に現れたのである。天外氏と十吾氏とは、直ぐ次の「ハンピン奴」のこしらへに懸ればならない。その瞬間の時間を

無理して寫眞を頼まねばならない

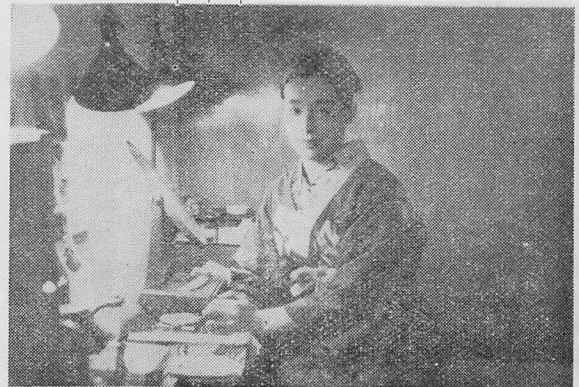
のだから中々の苦心だ。天外氏の部屋に入ると、もう双肌をスツボリと脱いで顔のこしらへに懸命の場面だ。僕は樂屋風景にふさしくカズラ下を付けられる處をスケッチすることにきめた。



(3)

(寫眞・5)

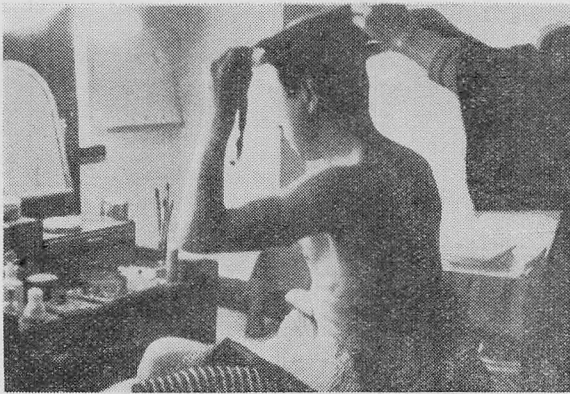
「一寸かふ向いたとこも面白うおつしやる」とカメラの方を振返つたところを、またパチリ。(寫眞・6) これで中々立派な樂屋風景が出来上つた。フト側を見ると古い演劇新潮が五六冊積み重ね



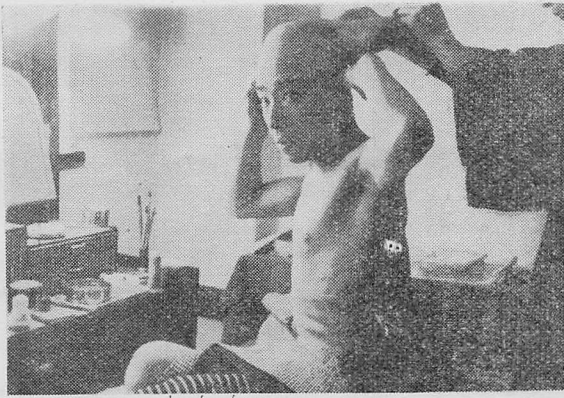
(4)

である。天外君勉強家だなアと部屋を出る。同じ部屋に元安豊氏が御一緒だったが御食事中だったので失禮した。

次に愈々本陣たる十吾氏のお部屋を訪れる。弟子の運ぶ大きな金ダラヒで顔を落されたところ。



(5)



(6)



(7)

これから「ハンピン奴」のこしらへだ。細い十吾氏が大きな座蒲團に坐つて大きく目を開いた處へピントを合せた。(寫眞・1・)側には弟子がもう衣裳を持つて控えてゐる。これが一瞬の間もない勞働だ。又次の部屋には狂言作者が原稿用紙と首ツ引きで茂林寺文

福先生の案を脚色してゐる。矢張り此の部屋だけは異様な重々しさが漂つてゐた。奥まつた處、天外氏と向ひ合つた部屋が石江薫さんの部屋になつてゐる。此處はまた打つて變つてまるで花束をアチまげた様な艶麗さに漲つてゐる。石河さんはもう

持役もないのだが樂屋風景の寫眞をお頼みするとわざ／＼カズラ下まで付けて下さつた。その堂々たる姿態には矢張り此の劇團第一の女優さんの風格があるのは争へないところだらう。(寫眞・7・)外に小織氏東氏を訪れたのだが持役の濟んだ爲外出中で撮れなかつたのが残念。しかし只一度の訪問で豫期以上の收穫を得られた事は幸甚だつた。觀覽席に戻ると、「ハンピン奴」開幕のベルが場内に鳴り渡つて、矢が上にも觀劇気分をアホツてゐた。(三月二十六日訪問)

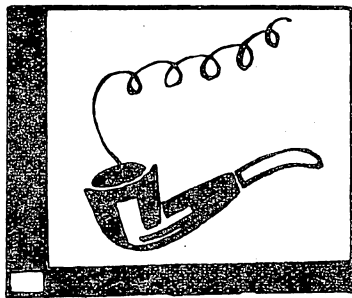
京都歌舞伎座焼失に因んで

祇園館に於ける

團十郎と鴈治郎

(下)

山川聽雨



承前

○明治廿三年一月十四日(千八十四號) 祇園座 同座は十一日物渡ひ十二日開場式にて貴顯紳士を招待し昨日が初日の由なり。

鴈治郎の弘め 去る十日の夜中村鴈治郎が弘めの爲今度上京の俳優其他關係の者一同を祇園社内中村屋へ招き盛んなる酒宴を開きし由なり席上取持の藝子舞子六十餘名にて得意の藝をなし俳優も衆五郎は北州勘五郎はいたこ出島升六は柵の達磨團八升藏はかつばれ小

傳次は山姥鶴藏喜知六も各々藝を見せたるには彼の地の人も大喜びなりしと又た藝子の内に指揮官とも云ふべきは六十餘のもの三人五十四十のもの數人ありて長生をすれば珍らしき事を見るものかな是も阿彌陀様のお引合せと竊に袂から珠敷を出して念佛を稱へた藝婆もありしとのことなり。

○明治廿三年一月十九日(千八十六號) 祇園館 同館は去る十二日豫定の通り開場式として小演劇を執行せり先其景況は舞臺の正面へ紅白布交の幕を張り

先年新富座に於て布哇國王より賜りたる縫の純帳幕を卸し蘭人より守田勘彌へ贈りたる天幕及び成田屋十八番の幕(三升連より贈る)又今度鴨川組より團十郎へ贈りたる無地金の天幕左右棧敷上へ牡丹と三升の紋附たる小旗數本を掲げたり此の日來場ありしは京都府知事を初め貴顯紳士諸會社員新聞記者其の外等なり偕て市川團十郎は洋服にて舞臺の中央に立ち今度來京の口上を述べ福助鴈治郎秀調鶴藏傳五郎勘五郎等は袴羽織にて左右に居並び一禮終つ

て式三番供奴子寶鞍猿を演じ午後八時頃打出したり翌十三日目出度開場せり當日出幕は式三番口上だんまり一の谷陣屋鳥目の上使吃の又平にて打出此のひびろ目とは云ひ乍ら朝より賣切れに日平直段とは云ひ乍ら朝より賣切れに成り東の下二段は祇園新地の藝子舞子連中が數十名にて見物すその他何れも美しき見物にて場中満々たり劇場表には西京株式會社より團十郎へ送られたる米百俵及び酒樽數十駄の積物あり又鷹治郎へも松節數十樽を積祇園町兩側の軒へ福助の提灯數張を撒杯立連ね實に勇ましき容様なり十四日は物幕出揃ひにて午後十二時を限り打出せり。

○明治廿三年一月二十二日(千八十七號) 祇園館 西京よりの報知によれば同館は日を追つての大入にて毎日二百七八十軒の賣高なり團十郎と鷹治郎へ東京吉原角海老樓より引幕を贈れり二の替りは豫定の通り假名手本忠臣藏大

序より七段目まで淨瑠璃は山姥との噂さ……(中略)……鷹治郎は大阪の同業より云々も有りしが事濟みになりし由なれば團十郎の歸京に多分同道するならんとの噂さ……(後略)

○明治廿三年一月廿八日(千八十九號) 祇園館二の替 同館は本日狂言を打上げ二三日休業して次は假名手本忠臣藏中暮鈴ヶ森淨瑠璃は紅蕙狩と極り役割は桃井若狹之助早野勘平竹森喜多八白井權八清水一角(鷹治郎)加古川本歲高野師直(傳五郎)壺谷判官寺岡平右衛門惟茂(福助)顔世御前おかる(秀調)大星由良之助播隨長兵衛鬼女小林平八郎(團十郎)等なり。

○明治二十三年二月四日(千九十一號) 中村鷹治郎同人は豫て上京の根ざしなりしが幸ひ今度祇園館の興行より彌々望みを果し忠臣藏を打上げ次第團十郎と共に上京し歌舞伎座へ出勤にて御目

見得をするよし早く見たう御座ります。

○明治廿三年二月十二日(千九十四號) 祇園館定價附 上等棧敷一間に付四圓廿五錢上等場一間につき二圓七十五錢中等場棧敷二圓五十錢中等場二圓なり

○明治廿三年二月十六日(千九十六號) 祇園館 同館の二の替りは去る十一日開場にて出幕は忠臣藏七段目まで二番目鈴ヶ森中暮紅蕙狩にて打出し(明日出揃ひ)雪中乍ら大入附込も多く人氣は以前に倍し益々上景氣なり團十郎の由良之助は今更言迄もなし傳五郎の御直勘五郎の定九郎何れも上出來福助の判官平右衛門も評よし取分け惟茂は前敗を雪ぐの出來なり(山川註——福助がお目見得にて演じたる六歌撰は不評であつた)鷹治郎の若狹之助は末廣屋張りにて十分の出來勘平は何處か寺島を模せし容あり權八は能教へ能覺へて

妙なり(山川註——) 鴈治郎の權八は團十郎が直々に手を取つて教へたと云ふ曰く付きのものであつた) 秀調の顔世は申分なし六段目のおかるは近來の稀ものと云ふべし實に一幕を一人で演じてゐる様に思はれたり此優の人氣は日を追つて盛んなり當興行も必ず大當りなるべしと該地よりの報。

中村鴈治郎 同人は器用な質で今度祇園館の興行に若狭之助を末廣屋勘平と權八は音羽屋流で演られたり此の音羽屋流の聞合せは菊三郎を始めとして傳五郎勘五郎等の由勘平は大滞にて二人侍が與市兵衛の死骸を見てゐる内に腹に突込むは誰かの形ならんが至極よろしく權八は梅辛茶の着附にして委く寺島を移せしは感心なり稽古の折に聲色で教へて呉れと堀越も云はれし由當人は教員が澤山で随分骨の折れし事と察しられたり

(山川註——) 此の間千九十七號に東京

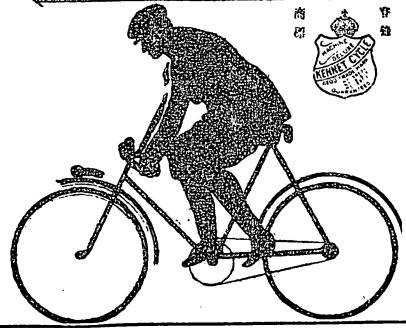
三升連十三名の上京あり二月十六日が總見日にて見物料は汽車賃往復共で十九圓とあり以て當時の物價を知り得るであらう。此の三升連觀劇の服装は残らず黒の着附三升の紋附だつたと云ふのだから擬つたものだ)

○明治二十三年二月廿二日(千九十九號) 秀調の病氣 坂東秀調は今度祇園館の興行に就きめきめきと人氣を増し同館第一の評判なりしが疝氣の爲十九日より舞臺を休みて療養中なりと此の代りには六段目のおかるを葛之助七段目のおかるは鴈治郎が勤め兩優とも中々上出来にて評判よし。

○明治廿三年二月二十七日(千百〇一號) 祇園館西京團十郎の一座は廿四日が樂にて團十郎一座は名古屋末廣屋へ乗込み高福鴈治郎は大阪角の芝居にて名残り日蓮記を演ずる由。

以上は單なる抄録には過ぎないものではあるが、かうしてまゝとめて配列してみるとまざまざと當時の情景や秀調氣に觸れる様で中々興味ある讀物と云へる。次回には成駒屋が始めて東上した折の記録をお目かけ様と思つてゐる。

ケンネート



萬人愛好の 携負車
 國産品中の完璧 是非御愛用を

市内特約店ニヤリ
 株式会社 大澤商會
 京都市三條通小橋西



寺小屋「松王の型」

—其の二—

編輯部編

(首實檢には右の標準型以外に種々なる異型珍型あれど異型の二ツを左に記す)

一 八百藏の型

蓋を左側に置き右手をその端にかけ左手だけを開いて頬杖の形となる。

二 市川家の型

ためつがめつ……で松王の前にある首桶を玄蕃が明け首を両手に持ち乍ら中腰で松王に見せると松王は刀を抜いて源藏に突附け左手を頬杖の形にして首を視

イザ松王丸……お目にかけん

静々立つて松王丸

扮装

小太郎が母涙ながら

「シテ其許は何人の

詰め、よく討つた……で其刀を
持替へ右を舉げて褒める。

この台詞が終るまで、松王は喪神の
態

玄蕃に一禮し刀を杖に立上つて木戸
へ出る、木戸から出てからは氣を變
へて足早やに駕に乗る。

……二度目の出……

打裂羽織黒仕立、縁取袴、紺足袋、
手には深編笠を持つ。

下手より跡を見返り乍ら出で、門口
で話聲に耳を傾ける。

松の枝に短冊を附けたるものをなげ

御内諺

「ウニイヤ源藏殿……」

……先刻は段々の……

……おゝ御不審な御尤も……

よもや貴殿が……

……女房千代と……

……机の敷を……

……推量あれや源藏殿……

(聲を伏せて云ふ)

……持つべきものは子で御座る」

込む

源藏が松王と知り驚いて刀を振り上げ斬掛けるのを引外して

大刀を鞘共に抜き出し右を柄頭に掛け横に構へて鎧で支へ止め

附廻して上手に行きまた進み寄る源藏の前へ斜下向きに腰を浮して膝を突き、大刀を投げ出し又小刀を抜いて源藏の足元に置き刀を振り下す源藏と見合つて右指で刀を指し左手を張つて膝へ突き、右手を開いて源藏を止める心で延して雙方極まる。

両手を膝へ置いて源藏と斜下手向に相對した形

右膝を動かして形を變へる

左の手を後ろへやつて千代を示す首を差出す

膝で正面を向く、手は兩膝に置いてゐるが兩手の先が膝の肉に喰入る程

「内で存分ほえたではないか……」

(餘り角立たぬ様に叱る)

「申しつけてはおこしたれど……未練な死を致して御座らう……」

(首を下げ云ひにくさうに云ふ)

源「潔う首さしのべ」

松「あの逃げ隠れも致さずにな

(疊重ねて問ふ)

源「ニツコリと笑ふて」

松「何ニツコリと笑ひましたかあのニツコリと……」

……コリヤ女房笑つ

でなくては見物は泣かないと云はれてゐる。

「ナニ」と云ふ氣持で顔へ上げ乗り出して行く氣味

ボンと右の膝を打つ

ズット源藏の台詞に重ねて

上手の千代を見返つて云ふ

たやい……

「源藏殿御免下さ
れ」

菅秀才の出

「不憫の者や」

「序ながら松王が御
土産」

「用意の乗物これ
へ」

「あの乗物に移し入
れ……」

……野邊の送りを營
まむ

夫婦が上着を取れば
……下は白無垢……
いづれもには門火々

懐紙を右に置き右手を震はし乍ら紙
を取つて涙を押へ泣聲で悲嘆にくれ
る

紙を懐に納め下手横向の形で頭を下
げる。

菅秀才へ一禮する。

涙を押へ乍ら左の手に刀を取り木戸
を出て四圍を見廻し下手揚幕につて
云ふ。

駕が据えられると蓋を開けて御台に
左に持つた刀で家の方を示し片膝つ
いて御台の木戸に入るを待ち、立上
つて以前の位置に坐る。

右手で駕を指す。

千代に云ふ。

上着を脱ぎ袴を坐つたまゝで脱ぎ上
下白無垢となる。
小刀を挿し戸浪が門火を焚くと下手

☆
散りぬる命

故郷と立別れ鳥邊野
さしてつれ歸る。

向で珠數を取り合掌す。

正面に形を變へ

御台と源藏とに一禮して立上り千代
が小太郎の死骸へ近づかうとするの
をコリヤと止め下手で斜上手向きに
股を割り左にかゝつた形で左の掌を
上に開き右に大刀を逆を取つて匿す
様に後ろに持ち首を下げて敬ふ。此
の形の引張の見得で幕。

次 號 豫 告 . . .

「作家訪問記」は

瀬川春郎氏の巻

御愛讀下さい！

五 日 發 賣 !

訪 作
問 家
(3)

中井泰孝先生の巻

垣 久 桂 子



春である。
「中井泰孝先生を訪問せよ」と編輯長から命令が発せられたのである。

のい、先生のお宅の二階の書齋で先生と對面したのである
以下、先生と私の愚問賢答である。
「先生はお医者さんだと聞いてゐますが、何故作家に轉向されたんですか」

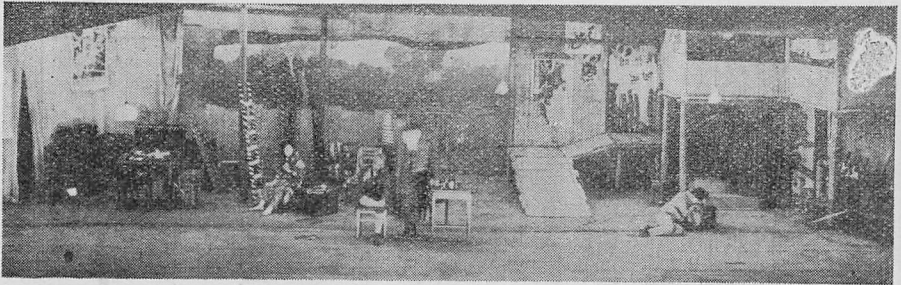
で、私は鉛筆と原稿と摺んで南海電車に乗たのである。

その車内で、中井先生に發すべき質問の數々を腦のなかで組立て、ははぐし、練りに練つたのである。何でも中井先生はお医者さんだつたといふ——私はいま劇作家となられてゐる先生を診察しやうとするのである。逆にこちらが診

察せられないやうにと、その意氣や壯なるものであつた。それらは、私に程なく、玉出驛から二丁ばかり南の陽當り

「醫學生くづれでしてね——その頃私は、慈惠會醫科大學に通つてゐたんですが、在學中に小説などを書いてました。その動機は日活の文藝部に笹山銀葉氏がゐて、初めて書いたシナリオがすぐ映畫になつたからなんです、それに力を得て、根岸興行部に屬して常盤座の水野好美、佐藤歳三等の劇團奨勵會に「情炎」といふ脚本を送りました。これは私の處女作と云ふべきもので、この頃、佐々木幸郎のヨタモノ時代のサトウ・ハチローが淺草に居ました」

「それから、劇作家への一筋途だつたのですか」
「いゝえ、そう人生は簡單に行きませんよ、確かあれは大



止七、八年ですか——それから雑誌記者をやつたり、或は松竹キネマの創立と共に、蒲田の文藝部入りをしました。この時は、伊藤大輔、佐々木奎郎、大久保忠素君などがゐりました。又キネマ旬報の田中三郎君なども松竹キネマの洋書のタイトルの翻譯係をやつて居り、裏紙のやうなもので、ぼつ／＼キネマ旬報を發行してゐましたよ、それから公園劇場で村田正雄、深澤恒雄、五九郎の合同した一座へ脚本を書きました。川村花菱氏も加つてゐたと思ひます」

「そうすると、喜劇の脚本も書かれたんですか」

「いや、喜劇は畑違ひでして、小橋梅夜君が専らやつてゐました。この劇團も永續させず、私

は長田秀雄君、榎本清君などと東京新劇協會などをやりましたが、餘り成功しませんでしたよ」

「それから、大阪へいらつしやつたんですか」

「えゝさうです」

關西へ來られてからの中井先生の活躍は、今更、私が廻らぬペンで書くよりも讀者諸氏の方がよく御存知の筈であるから、これはオミツトする事にし先生に代表作をお訊ねすることにしました。

「先生御自身で、傑作であり、よき舞臺であつたと思はれた作品？」

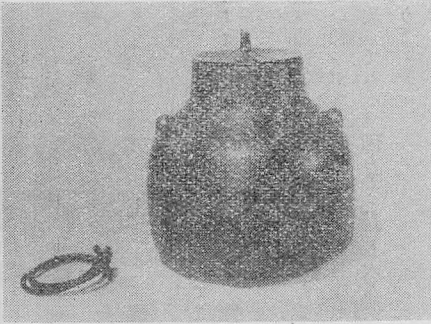
「さあね、自分から云ふのは可笑しいですが、井上、水谷花柳等によつて、初演の『夜の窓』でせうね」

「先生の『春日局』も度々上演されますね、それに變つた處では、淡海劇の『或る日の父さん』がありましたね」

「えゝ、淡海劇もあの頃は客を呼んだものですね、『春日局』は確か初演は、壽三郎、福助(現梅玉)だつたです」

「東京と大阪の芝居に就て何かお話が願へないでせうか」

「原因は種々あると思ふのですが、もう少し潑刺たるものがなければいけませんね、全面的にもつと刺激を享けて、いゝ芝居を見せて欲しいものです。ともかく、東京より大



阪の方が刺激が少いですね……現在大阪にゐる私がかんことを云ふのは變ですが……

「失禮かも知れませんが、先生が初めて脚本料なるものを貰はれたのは幾らでしたせうか」

「先刻お話しした根岸興行部から『情炎』の脚本料として三十圓受取りました。日活へ書いたシナリオは十圓位でしたせう」

「處で先生のお宅に金の茶釜があると専らの噂なんです」

「金の茶釜、そんなものはありませんよ、唯鐵の釜が有ります。これは先祖傳來の品でして、私の祖先是奥州日本松

藩羽仁五郎左衛門の御殿醫でして、鹽田仲節といふ人が藩主より何かの機會に拜領したらしいのです。私の家では是を桐の御釜と何でも無いように云つてましたが、色々調べて見ると、歴史に太閤秀吉が、羽仁五郎左衛門に茶の湯をすゝめたとありますから、或はこの

釜は太閤秀吉が羽仁五郎左衛門に與へ、更に、私の祖先の鹽田仲節が貰つたのではないかと思つてるんです」

「相當なもんですね」

「ともかく釜には桐の紋があります。磨滅してゐますが」それから、先生は種々桐の御釜の話、映畫の話、芝居の話などされたが、私は厚く御禮を述べて辭去した。

(寫眞説明 (1) 中井先生 (2) 夜の窓舞臺面 (3) 桐の御釜)

本誌へ廣告御希望

道頓堀營業係へ

の方は至急に

編輯後記

村上勝

◆花と共と道頓堀各座は非常な大入である。中座、歌舞伎座、浪花座、角座に各劇團が競演してゐる。

◆南座の關西新派劇も活況を早してゐると悦ばしい便りがあつた。家庭劇は目下名古屋に巡業してゐる。恐らくこれも大入続きであらう。

◆さて今月の發行が非常に遅れたのは申譯けがない。一日でも一時間でも早く發行したいのが編輯者の希ひなのである。深くお詫びします。

◆本號の讀物は先月お約束したやうに、特輯物揃ひで、本誌ならではのものばかりである。御多用中御寄稿下さいました先生方へ誌上にてお禮申し上げます。(村上)

×春風駘蕩、まことに保名の舞臺面そのままの氣候になりました。今年冬が厳しかつただけに餘計に春を待つ心持が濃かです。

編輯後記を書いてゐても何となく「ウツラく」となりそうです。十里隔つた大阪の編輯部でも吃度そうだらうと思ひます。

×本號では新らしい試みとして「家庭劇樂屋風景」をお目に懸けることにしました。今後機會がある毎にかうした試みを續けたいと思つて居ります。次號には豫告通り海の井氏と瀧嬢の御出陣を願つて、語つて頂く筈ですが、この内容は次號へのお楽しみと云ふことにして、一寸只今申上げられませぬ。

×松玉の型はお蔭で好評で喜んで居ります。かうした型付の書き方は他誌では試みられなかつたゞけに編輯者の方も鼻が高い譯です。次號掲載の狂言は目下選定中ですから御期待あつて下さい。

×當市の大西氏が壽三郎論を谷氏が延若長三郎論を寄稿されました。愛讀者の爲に出来る限り紙面を提供致しますから、お氣輕にゞし御寄稿下さいませ。

(京都・大橋孝一郎)

昭和十一年四月一日發行

月刊『道頓堀』第十一年
雜誌『道頓堀』第百十五號

◆誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◆郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。
◆御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪府北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部金參拾錢(郵錢五厘稅)

昭和十一年四月一日發行
昭和十一年四月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行者 松竹興業株式會社大阪支店

共同編輯 山本 上 貞 三
鳥江 鏡 也

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

編輯 京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始確 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉 スキナ石鹼

昇竜特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

登録商標



大坂 朝日堂株式会社 發賣元

大坂 中田スキナ屋謹製 本舖



昭和十二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年三月廿一日印刷（毎日一回）
昭和十一年四月一日發行（日發行）

總州俠客傳

松竹一キ
秋山耕作監督

近日封切



坂東好太郎
飯塚敏子
坂東橘之助

主演

第一映畫

淺香新八郎

野津

特別出演

花岡菊子
志賀靖郎
坪井哲
山路義人
永井柳太郎

高松錦之助
澤井三郎
冬木京三
日下部章

京都撮影所
春季大作
脚色 柳川真一
撮影 杉山公平

松竹キネマ大阪支店

「道頓堀」

第百十四號 第十一年 四月號

部金參拾錢